
少女的狩人の日常

冥界寺吹雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女的狩人の日常

【Nコード】

N5485H

【作者名】

冥界寺吹雪

【あらすじ】

この物語は、失踪した父を求めて狩人になることを決意した少女が運命に翻弄されつつも数多の苦難を乗り越えていく、少女の成長の軌跡を描いた小説とかじゃないです。そういうのをご所望の方は他の作者さんが素晴らしい作品を書かれていますのでそちらをどうぞ

一、兵少食尽

ここポツケ村のハンターは決して十分な人数とは言えませんが、どの方も腕の立つ方ばかりです。その為、集会所には他地方から様々な依頼が舞い込んでくるのですが、過疎化が進んでいるのが大きな要因なのでしょう、やはり人手が足りません。

私の父ウイリアも、そんなポツケ村に住んでいた超一流のハンターです。一人であお・・・しゃいろんでしたっけ？を撃退に追いやったとか、村を襲ったていらのれつくす・・・だったかな？を討伐したりと、数々の逸話を持っていたりします。

住んでいた、というからにはそれは過去のお話でありまして、現在はかわいい一人娘を残してどこかへ行ってしまいました。旅立ち際の父の言葉は今でも鮮明に覚えています。

『うふふ、新天地、新モンスター、うふふ・・・』

・・・思い出しただけでも悪寒が走るのでやめておきましょう。そんな訳で普段通り狩りに出かけた父でしたが、かれこれ半年顔を見せていません。

おかげで食も底を尽き、絶賛超極貧生活中の有様です。近所の方からご好意でいただける山菜とか山菜とか山菜とかを大事に大事に保管しては毎日少しずついただきます。味に飽きないように炒めたり煮たり焼いたり薫製にしたり生でいったり、山菜料理ならもう負ける気がしません。肉ってなんでしたっけ？

そんな私も今日で15歳になるわけですが、果たしてそれが何を意味するでしょう。あ、いや、何もそのあなたにお誕生日のお祝いに食料をいただこうとは考えていませんよ？じゅるり。

15歳と言えばハンター登録が許される年齢です。つまり、この私もハンターとして登録して狩り場に出かけることが出来るようになるのです。

当然の如く、ハンターなんて御免被りたいものです。あんな汗臭い集団と一緒に訳のわからない肉食怪物のいる森だの洞窟だのにか弱い私が行きたいはずがありません。お家で平素平穩に過ごしているのが何より一番ですよ。

さて、いよいよ食が尽きました(きゃー)。

15歳は、いわゆる成人と呼ばれる年齢であつたりもします。つまり食つなら働け、働かざる者食うべからず、です。いくらやさしいご近所様とはいえ、成人したからには食料供給も減る一方なのです。そこで目にしたのが、父が遣した様々な武器の数々(死んでいないとは思いますが)。生前、父は私にも扱える武器はあると申し上げ

ていましたからには、きっとこの武器山の中にも扱えるものがあり
ましょう。
先にも言いました。働かずに飯を食え。・・・違った、働かざる者
食え。・・・これも違う。・・・まーそんな感じでして、明日の健
全な食生活の為には私も狩りに出なければと思いいったのです。背
に腹は替えられぬ、です。ああ、私はなんと哀れな少女なのでしょ
う、ぐすん。

というわけでやって参りましたのはポツケ村集会所。昔は父によく
連れられて来たこともありましたが、最近はこの汗滴り男かほ
る場所に来る筋合いはありません。それがまさか私のような弱い
娘が通うことになるうとは、この時の私はまだ知るよしもなかつた
のです（ナレーション調）。

「ん、あんた確か・・・シエリアちゃんだよな？」

「はひっ!?!」

超フランクな女の人の声でした。それが突然私の名前を呼んできた
ものですから、反射的にそんな間抜けた声が飛び出してしまいまし
た。大衆の前で、ああ恥ずかしい・・・。

「そんなに驚くことないじゃないかい」

その声の主は木製のカウンター越しに腕をついて座っているベリー
フランクなお姉さんでした。その姿、数回ですが見た記憶有りです。

「でー、どうしたんだい？そついや最近あんたの父さんを見かけないけど、たまには顔を見せるよう言っておいてくれないかい？」

「あ、ええと・・・」

人付き合いは昔からどうも苦手です。相手の顔を見て話すのがどうもやりづらいと言いますか、怖いとまではいかないんですけど・・・。

「相変わらずのモジモジっぷりだねえ。ちょっと前に成人になったみたいけど、中身はなーんも変わってないなー」

「あの、いえ、実はですね・・・」

私はしどろもどろながらも現在私がおかれている現状について説明しました。はじめのうちは微笑なんて浮かべながら聞いていたフラंकさん（仮）であります。次第にことの重大さに気付いてくれたのでしよう、私の話にうんうんと相槌をうちながら時折柄に似合わぬ溜息を交えたりもして下さりながら、

「そいつはえらいことじゃないか。それで、お父さんを探しに行く為にハンター登録をしにきたと」

「いーいえいえ！あんなモンスターヲタクのどうしようもないダメオヤジの為にどーして私が命をかけての大冒険を繰り広げましょうか！」

「娘にここまで言われるウイリアって・・・。てことは、何か別の理由があるんだね？」

ハンターと言いましても、自給自足が出来る程度のささやかな報酬の依頼で構わないのです。誰も、巨大な怪物と対峙して一獲千金を狙おうなんて思っていないよ。そういうのは父だけで十分です。

「まーよく分からないけど、とりあえず簡単な依頼を任せてみようかね。雪山草15本の納品なんてのはどうだい？」

依頼書を見させてもらいましたところ、なるほど。どうやら雪山に自生する雪山草という薬草を摘み取ってくるだけの御依頼のようですね。これなら駆け出しどころか最初の一步踏み出しハンターの私にも難無くこなせそうです。

「んじゃ、その道まーっすぐ行ったらベースキャンプがあるから、そこを拠点に頑張んなー」

そんな軽いノリで、私はその依頼を受注してしまったのです。インストラクターみたいな人もついてきてくれない完全放置プレーが私の小さな胸を不安で圧迫します。しかし、ここでくじける訳にはいきません！全ては明日の食の為に！

二、他力本願

意気揚々と集会所を飛び出しました私はフランクさん（仮）に貰った地図を頼りに足を進めます。

途中、何のモンスターが分からない生首を担ぐハンターさんとか、真つ黒こげの人を担いで道を下る医務の方（？）とかにそうぐうして幾度となく帰ろうと思いましたが意外や私、食のこととなると相当精神が屈強になるようです。歩き続けること20分、私の眼前に広がるはポツケ村を遙かに凌ぐ程の積雪を誇る雪山でした。父から噂では聞いていましたがなるほど、これはなかなか立派な狩猟地帯のようです。

「ええと、ベースキャンプは・・・」

周囲を見渡すと、ありました。モンスター対策でしょうか、平地より盛り上がったところにひっそりと佇む黄色い影、長年整備されていないのでしょうか外装はボロボロではありますが雪風くらいは凌ぐことができそうです。随分と長いこと歩いてきましたし、ここで一服したら出発でございませう。

・・・うつかり寝過ぎました（いやー）。日も既に傾きかけ、冷たい風が私のか弱い体を容赦なく貫いてゆきます。ですが私、めげません。こんなところでくじけてしまつては食事は愚か、お家に帰ることもままならないではありませんか！雑草の十本や二十本、一瞬で集めてみせますよ。

洞窟を抜けるとそこは雪国でした。

というか、豪雪でした。なんなんですかこの雪は！吹雪で雪山草どころか目の前すら見えないじゃないですか！あのフランクさん（仮）め、駆け出しハンターにこんな難易度の高い依頼を持ち掛けるとは詐欺もいいところです……。とにかくこんな視界ゼロの状態では依頼どころではありません、とつとと退散が吉であります。と、軽く思っていたそのときでした。

ガールルル・・・

・・・ガールルルですつて。ちょっと待ってくださいよ冗談でしょ？なんですかこの『餌が来た、食っちゃうぞ』的な鳴き声は！そしてその瞬間運がいいのか悪いのか、調度吹雪が弱まるとその悪魔のような全貌を激写することに成功したのです！（私混乱中）

グオオオオオン!!

その巨大な白い類人猿は私を襲おうと強烈な雄叫びを上げたのです！これはなんの陰謀でしょうか？草摘みの依頼のはずがこんな大型猿モンスターを討伐しろと？冗談も休み休み言いやがれです、ピクニック気分です武器の一つも持っていない私をなめるなであります！

グギャアアアア！

早速の飛び掛かり攻撃で絶体絶命です！。もし私が死んだらあのフランクさん（仮）を末代まで呪ってやるですー！

「せええい!!」

奴の一撃の代わりに聞こえてきたのはそんな踏ん張り声でした。思わずつむってしまった目を恐る恐る開けますと白猿さんを一閃、銀色に輝く太刀の一薙ぎがぱっさりと切り捨ててしまったのです。

「大丈夫かいお嬢ちゃん、怪我は？」

そんな台詞を吐きながらおっかなびっくり転倒してしまった私に手

を差し延べるのは暖かそうな防具に身を包んだ男性ハンターさんでした。その手を私は色々な理由でがくがく震える手で掴むと程よい力で私のか弱い体をゆっくりと起こしてくれます。

「は、初めまして！本日もいいお日からですね！」

初対面の方はやっぱり苦手です・・・

「あは、確かに今は吹雪も晴れてるね。僕はハルス、ドンドルマの雇われハンターだよ。君は？」

「わわわ、私はシエリアといいます！その、危ないところを助けていただきまことにありがとうございます！」

うぎゃー、壊滅的な文法ですー！

「そんなに固くならなくてもいいよ。それよりどうして君みたいな若い娘がこんな時間に雪山に？」

「あ、いえ、実は雪山草を探しにきたところあの獰猛でいかつい顔の悪魔とばったり遭遇した次第であります！」

「雪山草をこんな日没の時間帯に？昼間ならモンスターもいなくて安全に採れるからいいけど、この時間帯は余りオススメできないなあ。ギルドの人に言われてこの時間に？」

「え、えつと、まあ、そんな雰囲気です・・・」

キャンプで寝過ぎしたなんて口が裂けても言えません。

「そうか・・・。これで足りるといいんだけど、はい」

そう言うとハンターさんは束ねられた草を私の手の平に置いて下さいました。これってもしかして・・・

「何かの足しになるかと思って拾ってただけど結局余っちゃってね。よかつたら貰ってよ」

私、感動で言葉も出ませんでしたとも。束ねられた雪山草は実に40本！これだけあればおつりがついてきますよええ！

「あ、ありがとうございますです！」

「お礼なんていいんだよ、余りものだからね。・・・おっと、そろそろ戻らないと奴らの活動時間だな。シエリアちゃんも一緒に戻ろう、気温も下がってきたしね」

こうして私の初めての依頼は超他力本願プレイによって大成功をおさめました。ベースキャンプで味わうホットドリンクの味はまた格別でございます。一仕事したーって感じです。

「それじゃ僕はドンドルマに戻るとするよ。シエリアちゃんも気をつけて帰るんだよ」

「あ、はい！また機会があったらよろしくお願いします！」

「あはは、それじゃまたいつかね」

いやーいるんですね神様って。あのお方がいなかったら私は危うく病院送りでしたよええ。それも雪山草をこんなに・・・うまい話って転がってるものなんですわー。そういうわけで依頼を達成した私は鼻歌まじりに帰路を突き進むのであります。

「シエリアちゃん随分遅くまでかかったね、少し心配したよ」
「あ、ちよつと帰りに寄り道をしたものでしてはいー」

嘘です

「まーでも初めてにしては上々の出来じゃないの。やっぱりウィリアの血を引いてるだけのことはあるね」

「いやー、それほどでもですー」

ハンターさんからおすそ分けして貰ったことは勿論内緒です。

「じゃこれ、報酬の三百ゼニー」

・・・はい？

さ、さんびゃくゼニーと彼女、今そう言いましたよね？

「あ・・・今なんと？」

「はん？だから、報酬の三百ゼニーだよ」

「・・・」

私思わず絶句致しました。三百ゼニーで一体何日持つと言つのですか！ミックスビーンスとパワーラードの繁殖期御用達セットすら買えませんよ、ええ！？ジャンゴネギをかじって生活しろとでも言うんですか！

「何だか随分不満そうだねえ。でも今ある依頼の中で一番楽な仕事だ、そんなもんだと割り切んな」

何と、ハンターの世界は世知辛いです……。

「そんなにお金に困ってるなら、都市で訓練してくるのはどうだい？村にも教官がいるにはいるんだけど、もう歳だからねえ」

「く、訓練？」

「そうさ、ハンターとして一人前になる為の基礎から学べるって話だよ？そうすりゃシエリアちゃんにももっと報酬の高い依頼を紹介できるってことさ」

まあ素敵。そうすれば夢の食料大国も夢ではないわ。

「でも、やっぱり高いんでしょう？」

「通販じゃないんだから……。費用はかからないらしいよ。何でもハンター育成の為に王国から特別手当がでてるんだとか。まったくばるい話だよねえ」

「ば、ばるい？」

「とにかく、出発するってんなら明日までには手続き済ませてあげるけど、どうする？」

とのこと。それは私だっでご飯は食べたいですからお金が欲しいのはやまやまです。ですが一抹の不安もあります。私のような弱い美少女が果たしてハンターなどという過酷で危険な職業が勤まるのでしょうか？ああ、不安でなりません。私は一体どうしたら

「おっけー、そいじゃ手配しとくから頑張んなー」

「まだ何も言っていないですよー!!」

こうして私のハンター生活が残念なことに始まってしまったのです。果たして私は勇敢に未知なる植物や素材を採集し、無事明日の食料を手に行き届けることができるのでしょうか？

三、格差社会

よく朝、フランクさん（仮）が用意しやがっ・・・して下さった宅配ネコによって都市までの長い道のりを下る羽目になってしまいました。

「ネコさんネコさん、都市部まであとどれくらいかかるのですか？」

私が質問致しますと丁重にも車（二輪に骨と皮を繋ぎ合わせて人が乗れるようにしたもの）をとめて振り返ってくださいます。その姿、ネコ大好きな私にとってはどんなにかわいいぬいぐるみよりもぎゅっと胸に引き寄せて抱きしめたい思いになるのですが、

「一日はかかるニヤ。それくらいもがまんできんのかニヤ、最近の若者は」

うわ、柄悪！

ということで一日時間を持て余してしまった私です。到着まで一眠りしようかしら？ちよっと考えてすぐに首を横に振りました。こんな揺れまくりで寝心地も悪い車（二輪に骨と皮を繋ぎ合わせて略）で安眠できるはずがありません。

「ねえネコさん」

このネコさんに話しかけるのはちよっと嫌でしたが、退屈はもった嫌です。

「お名前は何で言うのですか？」

するとネコさんは走りながらこちらに振り向きます。

「フランネルだニヤ。ニヤーの名前を聞くなんて珍しい客もあったもんだニヤ、気軽にフランと呼んでいいニヤ」

「何かを彷彿とさせる呼び名ね・・・色々アレだからネルにしましよ」

「・・・？まあ、好きにするニヤ」

あらま、意外にも好反応。もつと素っ気ない返事に対する返答しか考えていなかったのでちよつと焦ります。

「ハンターさんは何て言うんだニヤ？」

「あ、私ですか？私はポケケ村の金のたまご、シエリア。今は超新米ハンターの入口にすらたどり着いてませんけど」

「ニヤ？それじゃードンドルマに訓練かニヤ？」

「ドンドルマ？」

「これから行く都市の名称だニヤ。あんた、そんなことも知らずにここまでできたのかニヤ？」

「う。村の集会場の人に言われるがままにやってきたんだからしようがないじゃないの」

「はあ、人に敷かれたレールを辿る人生は惨めだニヤー」

何故ネコにここまで言われているのかしら私・・・。

「・・・てことはニヤ、もしかしてまだお手伝いアイルーは雇ってニヤいニヤ？」

「ええ、まだ」

途端です、ネルの尻尾が釣り糸に釣られたようにピクーンとそそり立ったのです。

「それは大変ですニヤ〜。お手伝いアイルーはハンターの基本ですニヤ。絶対に雇った方がいいですニヤよ」

「人格・・・いえ、猫格が突然変わりましたね・・・」

「そこですニヤ、是非ともこの私、フランネルを雇ってみてはいかがですかニヤ？その辺のアイルーの何倍もお役に立てますニヤ！」

最近のネコさんは賢いとは聞きましたが、これではまるで人間ですね。我々人類も生きる為に知能を発達させてきましたけど、ネコさん社会も私が思っていた以上に高度なようです。いつか地位が逆転したりしないんですかね？

「でも、やっぱりお高いんでしょう？」

「お代はとらニヤいですニヤ。ただ住む場所とご飯だけくれればよいですニヤ〜」

「というかあなたは宅配ネコさんなのでは？この仕事は続けなくてもいいの？」

「宅配は日雇いの派遣労働ニヤ、賃金低いし扱いも最悪なんだニヤ〜」

ネコさん社会もなーんか妙に黒い部分がありますね・・・。私が小さいころと言えばネコさんといえは癒し系マスコットの存在だったんですが、時代は流れましたねえ。

まあそんなこんなでネルが私のお手伝いアイルーとして（半ば強引に）頑張ってもらうことになりましたとき。ちよつと不安ですけど。

日が落ちてきました。周囲を見渡してみると砂砂砂砂砂砂……。

「ってー！どこ走ってるんですかー！？けほっ」

うー……埃っぽい場所は苦手です。それにしてもいつの間にな辺境の地までできてしまったのでしょうか……。

「ネル、まだつかないの？」

「この砂漠を越えればすぐニヤけど……、一眠りするといいニヤ。その間には着いてるんだニヤ」

「こんな骨皮さんベッドで寝られますかいな。ただ座っているだけでも腰が痛みますのに」

「これからハンターになろって人間がだらし無いニヤ……それニヤら砂の上で野宿でもいいんニヤよ？」

「おやすみなさい」

か弱い乙女にその仕打ちはあんまりです！昔から女の子はお姫様ベツドで子守唄を聞きながら寝るっていえ習慣がありますのに……。仕方ありません今日のところは我慢して寝ましよう。何時間もの退屈に耐え抜くよりは遥かにマシでしょうし。

かくして私は静かに眠りに落ちてゆくのでした。

四、新規入門（前書き）

シエリア訓練所編です。果たして訓練生活を期にシエリアはハンタ
ーらしく成長するのでしょうか？

四、新規入門

「いい加減起きるニヤー！とつくに朝回って昼なんだニヤー！」

ううん、あんまり叫ばなくてもいいじゃないですか。こんな骨と皮の上で寝ているんです、少しはいたわってくれてもいいと思うんですよね。あー背中が痛いです。

「ドンドルマ、着いてるんだニヤー！アンタ行くところがあるんじゃないニヤーのかニヤー!？」

「あら、もう着いてたの」

眠気で離れたくないと駄々をこねる私のまぶた達を無理やり引き離しますと、おお、なんと立派な町並み。ポツケ村なんかとは比べるのが失礼な程の都会っぷりでございます。流石世界の中枢と言われているだけのことはありますドンドルマ、壮観です。

「何ボケーっとしてるニヤ、さっさと目的地までいくニヤー」

「はいはい」

・・・と言われましても私ドンドルマの街に訪れるのは生まれて初めてでございます。勝手に目的地にされた訓練所がどこにあるのかなんて知っているはずがありません。ふう、詰みですかね、そろそろ帰りましょうか。

「っつて、あら?」

流れゆく人込みの中に見覚えのある顔がありました。忘れるはずもありません、かの雪山で多大なるご恩を頂いた……

「おや、シエリアちゃんじゃないか。どうしたんだいこんな街のはずれで？」

「お久しぶりですハルスさん。あの時は私なんかの為にご尽力の限りを尽くしていただきまことにありがとうございます」

ふえー！やっぱりこの方と話すのは苦手ですー！

「あはは、相変わらず面白い娘だね。それで、今日はお買い物？」

「いえ、実はこの街の訓練所にお世話になろうと思ひまして……」

「本当かい？偶然だなあ、僕はこの街の訓練所で助手もやっているんだ。今から帰るところだけど一緒にくるかい？」

「それは願ったり叶ったり……じゃなかった、ありがたい限りです！」

神様っているものですね、これで露頭に迷うってこともなさそうです。私つてばツイてるっ！

10分ほど歩きますと見えてきましたのは、まるでメロンパンのようなドーム型の建物。こんな立派なところに田舎者の私なんかがお世話になるなんて、ちよつと緊張です。

「父さーん、新人さんだよー」

父さんということはハルスさんはここの教官の息子さんかしら？だ

としたらやつぱりハルスさんに助けて貰ったお礼を言うべきですね。いえしかし、初対面の方にいきなりお礼というのは失礼かも・
・ううん。

「おーおーよくきたな！私の訓練所へようこそかわいいお嬢ちゃん。私がこの教官のバーグだ、分からないことがあつたら何でも聞いてくれて構わないからな」

「はひ、お父様。お目にかかれて光栄です！先日は息子様に助けて頂いて、恩義の限りでございます！」

油の切れたからくり人形みたいな感じですよ。すっかりカクカクな私。そんな痛い姿を見てもバーグさんはわっはっはと顔中をしわくちやにして

「到着してすぐだつてのに面白い娘さんだ！よし、堅苦しい手続きはなしだ、早速案内しよう、ついてきな、がはは」

鬼のようなスパルタ教官だったらせつせと逃げ帰ろうと思つていましたけど無駄な心配だつたようです。都会の人は冷たいと聞いていましたからそのギャップにはちよつと驚きです。

「ほら、この部屋なら空いてるから自由に使つていいぞ」

と案内されましたのは四畳半程度の小部屋でした。ちよつと狭いとはいえベッド、お台所、テーブルなど、必要なものは全て揃つています。これは快適。

「今日は日も暮れてきたし、ゆつくり休んどきな。明日から訓練を始めるぞ」

「あ、どうぞよろしくお願いします・・・」

訓練と言いますが、実際どんなことをやるんでしょうね。薬草の見分け方とか、おいしいキノコの分布とかでしょうか？そういうのが分ければ、ハンターとして一人前になれるのかしら！

「ニャー！ 鞆の中はあつついニャー」

「あらネル、よく眠れた？」

「次から鞆には氷結晶を詰めておくニャ。暑くて全然安眠出来ないニャ」

「贅沢なネコだこと。そんな高価なもの、買えるはずないでしょう」「ハンターなら採掘するニャ。武具を作るついでにちよいちよいと頼むニャ」

「嫌、ピッケルなんて重くて振り下ろせないし」

すっかり日も落ちて昼間の活気が嘘のように静寂に包まれたドンドルマ市内。ベッドに体を任せ、ふかふかの触感に満足です。昨日の骨皮さんと比べると、まさに雲泥の差と言えるでしょう。下手をしたら自宅のベッドより上質なものかもしれません。

「晩飯はこれだけかニャ？ もっと食べたいニャー」

「今日は我慢しなさい。私だってウォーミル麦パン一枚で我慢してるんですから」

「うっ、なんか惨めだニャ・・・」

おっしゃる通りであります・・・。

「空腹を紛らわす為にも寝るのが一番です。明日の朝ごはんがよりおいしく感じますよ」

これはなかなかの常套手段で、村で山菜が貰えなかった日はよくこの手法を用いたものです。ああ惨め。

「明日から訓練で手に入れた食料とかは分けてくれるそうですし、久々に私の料理の腕を光らせてあげますね」

「・・・ちよつと不安だニヤ」

「ならあげない」

「いやーアンタの食事楽しみだニヤー！勿論期待してるんだニヤ！」

「現金な人・・・いや、猫」

時計に目をやると10時、いつもの私ならとづくに眠っている時間です。

いよいよ明日から訓練が始まると思うとなんだかちよつぴり不思議な気分でした。

今まで村からほとんど出たことがなかった私がこんな都会の街で一人暮らします。

そりゃ不安の一つや二つなんてざらですよ？それでも若干の期待をこの小さな胸に抱いているのは明日の満腹の為なのでしょうか・・・
・考えてもでてきませんね。とりあえず都会の方と接する不安の割合が99%を余裕で超えていますし、この一人である気楽な時間を大切にしようと思います。夢の中でも誰にも会わないといいのですが・・・

かくして今日もまた夢の中へと落ちていくのであります。

五、五里霧中（前書き）

リオレウスやラージャン、テオにベルキュロス、イビルジョーなどなど手強いモンスターは数多なれど、本当に恐ろしいのはそれを狩るハンターだと思います。シェリアから見ればその辺のハンターも十分恐ろしいでしょうね（特に父親は色んな意味で）。

五、五里霧中

さて、突然ですが現在は密林で絶賛逃走中です。普段運動と縁のない私には鬼も泣かすような形相でジャングルを駆け回るなんてことが慣れているはずもなく、明日の筋肉痛とかが心配ですがーまあ、それは置いていて。

「こ、ここまでくれば流石に追い掛けては・・・」
グギャアアアー！！

ひいひいまだ追いかけてくるですー！たしかに私は美しくて美味しそうに見えるかもしれませんが、こんなところでおいしくいただかれちゃうのはごめんですー！そのあなた、ヘルプミー！

・・・え？唐突すぎて現状が理解できないですって？
のんびりと説明している場合ではないのですが・・・事は、訓練所での朝から始まります。

「薬草採取？」

起床してすぐ、教官がそんなことを言うものですから思わずキョトンと目を丸めてしまいます。薬草ならわざわざ採取しにいかなくてもお店に大量に陳列されているじゃないですか。それをまた何故わざわざ摘みに？

「初心者のおまえさんにはちょうどいい訓練になるだろう？」

「私、薬草の選別ならその辺のハンターさんよりもずっと知識があると思いますケド」

なんといっても薬草は私の主食でしたからね。

「がっはっは、そうではないんじゃないよお嬢ちゃん。薬草と言うのは知っただけの通り、比較的安全な狩場に自生しておる。新人のおまえさんをいきなり危険な狩場で訓練というわけにはいかんからの、そこで狩場の雰囲気にも馴染むことこそがハンターへの第一歩というわけじゃ」

なるほど、これも訓練の一環ということですね。これくらいなら楽勝です、たくさん摘んできて教官を驚かせてやりましょう。

「安全とはいえ小型の肉食モンスターは生息しておるからの、気を付けていくんじゃないぞ」

「……はい？」

その後、教官は私に片手サイズの盾と剣を渡すとさっさと二度寝に勤しんでくれちゃいました。かわいい子には旅をさせるとは言いませんが、旅をさせるのと放置プレーはまた別物だと思っただけですね。そんなこんなで狩場に着いた私を待っていたのはお腹空き空きモンスターでありまして、今現在このように逃走劇が繰り広げられている訳であります。

「逃げてばかりじゃ意味ないニヤ！剣を抜いて追い払うニヤ！」

「とととと言いましても私こんな武器使ったことも触ったことも皆無でございましてよー！」

「剣を抜いて、あのランポスどもの喉元をぶすりとやるニヤ！ここまで追いかけて来たことをあの世で後悔させてやるんだニヤ！」

モンスターどものナイフのような鋭い牙が容赦なく私に向けられています。こうなりややるしかありません、男シエリア、モンスターさんを一刀両断てややー！

「グギャアアアアア」

やややややっぱり無理！らんぼすだかららんるーだか知りませんけどあんな凶暴な顔したモンスターに敵うはずありません！

「諦めたらそこでクエスト終了ニヤ！剣が駄目ならこの爆弾を投げ付けてやるニヤ！」

そういつて手渡されたのは小型の時限爆弾。どこからとりだしたのか、何故こんなものを持っていたのかはこの際置いておきましょう。有無をいつてる場合ではありません、こんなやりとりをしている間も律儀に待っていて下さるらんぼすさんを更に待たせるのは悪いでしょうし。

「必殺、爆薬暗投！てえーい！」

爆薬暗投。それは私の先祖から代々伝わる秘伝の投擲法。緻密に計算され尽くした投擲時の腕角から繰り出されるその一撃はあらゆるモンスターの急所を捉え、その外皮を、毛皮を、甲殻を無惨にえぐり取る。あまりに危険なため一時は投擲法そのものを封印されたというのが現代のモンスターの凶暴化に伴い解禁されると同時（私必死に投擲中）。

「キャウン！」

当たりました当たりました、それも直撃ですよ！私の正義の炎があの凶暴で極悪非道なモンスターを打ち払ったのです！ほら、皆さんも黙って見てないで拍手ですよ拍手。

「なに一人で拍手してるニヤ。ほら、次が来るニヤ」

「へ？次・・・？」

秒間三フレームくらいのカクカクっぷりで首を何とかネルの指さす方に向けますと、爆死したらんぼすさんに群がる二頭のらんぼすさん、そして私に向けて牙と食欲（殺意）を剥き出しにする三頭のらんぼすさん。・・・ええと、3+2はいくつでしたっけ？引き算だったらよかつたんですけどさうですね、私の計算力があつぴよーなことになつていない限りは恐らく

「らんぼすさんが五頭・・・？」

「命運尽きたニヤ。あの世ではおいしい飯作つてニヤー」

「諦めたらそこでクエスト終了はどこへいったんですか！！」

ぬおー！こんなところで諦めてなるものですか、こうなれば自宅からこつそりポシエツトに忍ばせて来た秘密兵器の投入であります！

「これぞ人類の叡智が勝ち取った伝説のドーピングゲフィン。近未来栄養剤、強走薬グレート！ひとたび飲み干せばたちまち千里の道も走りきることができるようになるすぐれものだわ！」

「・・・戦わないニヤ？」

「戦うのとおいしいご飯、ネルはどっちが大事かしら？」

「それは・・・勿論デリシャスディナーニヤー！！」

全会一致で決議、安全な場所までひたすら激走開始ですー！薬の効果はそれはもう抜群、いくら走っても疲労息切れ筋肉痛何一つありません。あとから副作用とかなければいいんですけどね・・・。

走り続けること四、五分。ふと後ろを振り返りましてもらんぼすさんの様子は確認できません。どうやらなんとか一難去ったようでございます。逃走ばかりでちよつとげんなりでしたけど、漸く楽しい山菜（ついでに薬草）狩りタイムの始まりです。

「さあ、おいしい山菜達はどこかしら」

「山菜もいいニャけど、ここがどこかわかってるのかニャ？」

「当たり前ですって、この私のような初歩的でどうしようもないミスをそう易々と侵すはずが・・・」

突然ですが皆さん、海の上で遭難する原因が分かりますか？あーいえいえ、決して馬鹿にしているわけではありませんよ。そうです、見渡す限り全てが海、海、海と同じ光景なので、自分の現在地も目的地もわからないからです。

それでは私のおかれている現状を整理しましょう。まずは見渡す限り木、木、木。そして見上げれば鬱蒼と茂る忌々しい葉、葉、葉。建物目印一切ナシ。おお、これは素晴らしい、まさしく私がさっき言った状況じゃないですか。

・・・。

「……、どっこですー！……！……！」

「早速初歩的でどうしようもないミスをそつ易々と侵したニヤ……」

暗い森の中に一人（と一匹）残された私は一体この先どうなってしまうのでしょうか。次回の私、生きて帰っていますように……

五、五里霧中（後書き）

ゲリヨスから搾り取ったエキスと肉を調合した薬って・・・。おえ
え・・・。

六、密林脱出

歩き始めて早三十分、三十分前に見たのと同じような自然万歳の光景が続きます。ルームランナーの上をひたすら歩いているような錯覚にさえ陥ります。なんと達成感のないハイキングでしょうか。

「じめじめして暑いー。クーラードリンクを持ってくるべきだったかしら」

「靴の中にいるニャーの方がもつと暑いんだニャ。それくらい我慢するニャ」

「だったら靴から出て地べた歩きます？」

「か、靴は快適だニャー・・・」

モンスターも脅威でしたけど遭難と空腹、湿気のトリプルパンチはそれを凌ぎます。このまま適当に歩いていたらそのうちモンスターの巣窟に出て、何パンチだかわからなくなりそうです。

「そろそろ歩くのやめましょうか・・・」

我ながら最善の判断だと思います。こんなことになるなら遭難の経験を積んでおくべきでした。もつと涼しくて快適な場所です。

何気なく地面を見回してみますと赤、青、黄、紫といった色とりどりのキノコたちが目に映ります。とても食欲をそそる色ではありませんが、どれか一つくらいなら食べられる種類があるかもしれません。人間なんでも気合いが重要です。気合いがあればこんなカラフルなキノコだって美味しくいただけ・・・

「あら？」

ふと視界に飛び込んできたのは小柄で紫色をしたひらべったいタイプのキノコさん。このキノコはどこかで見た覚えがあります。食べることばかりに危うく脳を支配されるところでしたが、これは何か別の用途に使えたような。はて、なんでしたっけ？

「ああ！」

「ニヤ！？急に大声出さないで欲しいニヤ」

「ネル、これを使えば帰れるかもしれないニヤ。それに足が生えてニヤ

「これって、ただのキノコじゃないかニヤ。それに足が生えてニヤー達を目的地まで先導してくれるとでもいうのかニヤ？」

「案内が終わってから不当な請求とかされそうですね……。そうじゃありませんよ、このキノコがなんだか分かりますか？」

思い出したのです、このキノコの名称を、用途を。そしてよもやそれがこの現状を打破する為の恐らく唯一の鍵であろうとは。

「学名アカヌキ茸、通称ドキドキキノコ。非食用、食すと体力やスタミナ、力が増すこともあるが、またその逆も有り得る危険なキノコ。密林や沼地など、キノコが生息する場所なら基本的にどこにでも自生するが個体数は比較的少なめ」

「随分詳しいんだニヤ」

「主食ですから」

「……ニヤ！？非食用ってさっき」

「需要はないとされていたが、調査技術の向上により近年素材玉と調査できるようになったため以前と比べて格段に需要が延び、一部のギルドショップでは店頭に並ぶこともある。調査結果は採取依頼に欠かせないモドリ玉、比較的簡易な調査の為専用の書物を購入せずとも成功率は高い」

モドリ玉。使用者を瞬時にベースキャンプへ転送する近未来SF映画真つ青のトンデモアイテムです。つまり、モドリ玉の調合を成功させれば労力0で直帰イヤツホウなのです。

「モドリ玉！そいつはすごいニヤ、シエリアのことちよつと見直したニヤ！」

「私に対して負の印象しか持っていなかったような言い方ですね・・・」

しかし、一つだけ問題があります。残念なことに私、調合するための素材玉を持ち合わせていないのです。幸い素材玉はネンチャク草（天ぷらにすると美味しい）と石ころを調合することによって得ることができですが、持ち合わせのないネンチャク草は採取しなければなりません。

・・・面倒ですね。

「こんな時に面倒とか言ってる場合かニヤー！」

「心が読めるんですか!？」

ネルにも言われちゃいましたし仕方ありません、ちゃっちやと見つけて帰るとしますか。

ネンチャク草は非常に強い植物で、極端に高温、低温の場所でない限りはどこにでも生えています。ですのでこの密林でも探せばすぐ

に見つかるでしょう、そう考えていました。しかし神様の悪戯か私への試練か、一時間経つても二時間経つてもその姿を拝むことができません。日頃の行いは良いのにおかしいですね！。

最後の携帯食料を口に運び、これまた最後の水を飲み干します。

このままではシャレになりません、餓死は私の最も厭う死に様です。死ぬときだけはお腹いっぱいにご飯とステーキを食べてからと決めているのです。ちなみにアプトノスよりアプケロスの肉の方がコクがあつて好きなんですよね私。でも砂漠に住む彼らの肉はアプトノスのものに比べて高価でしてなかなか手がでないのが玉に傷です。そういえばポポノタンも結構クセになる味なんですよね。値段もそう高くありませんし、こちらはオススメです。

つて、何の話してるんでしよう私は……。

「見つけたニヤ、ネンチャク草だニヤ！」

ネルが叫びます。指をさす方向には、ほう、確かにあのネバネバ糸を引く白い植物はネンチャク草に間違いありません。ネル、グツジヨブです！そう言おうと思ったのですが、視界に映りこむイレギュラーのせいですっかり口が動きませんでした。

「あの、ネンチャク草の隣にいるのはもしかしてもしかすると……」

「大型にしてランポスのリーダー、ドスランポスだニヤ。性格は凶暴、仲間のランポスを呼ぶ危険なモンスターだニヤ」

「・・・見つかったらどうなると思います?」

「六話目にして完結になるだろうニヤ」

「にこやかな顔で恐ろしいことを言うのはやめてくださいー!」

じょーだんじゃありません、あんなところをうつつかれていたらネンチャク草を手にする前にあんぐりごっくんです。何かいい手立てはないのでしょうか・・・。

「あれは諦めて他のを探すかニヤ?」

「いーえダメですよネル。いち早く帰るにはあのネンチャク草で調合するしかありません!」

「変なところ頑固なんだニヤ・・・」

とは言ったものの、無策で突っ込むのは燃え盛る火に飛び込むようなものです。そう、要は作戦です。狩りをするにも策を練って挑めば成功率は格段上がるのです。実はいつらんぼすさんに襲われてもいように一つ、作戦を考えてあるのです。流石天才少女シエリア、こんなときにも頼りになります。

「ここで一つ提案です」

「・・・ニヤんだろう、背筋に寒気がするニヤ」

「名付けておとり作戦。一方がどすらんぼすさんを引き付けている間にもう一方がネンチャク草を入手、調合をするという合理的でパーフェクトな作戦よ。この状況を打開するにはうってつけだと思いません?」

「・・・で、そのおとり役は一体誰がやるんだニヤ?」

「やーねー、わかつてるクセにい」

「やややっぱりニヤ!ニヤーは嫌だニヤ!あんな怪物に食べられるくらいなら餓死した方がマシ、あんたが行けばいいんだニヤ!」

「ほほー、ネルに調合が出来ると申しますか？」
「・・・」

完全勝利です。

「お、覚えてるニヤ！生きて帰ったあかつきにはあんたの分の晩飯もねこそぎ食ってやるからニヤー！！」

「お体にお気をつけて」

勇猛果敢に立ち向かう（かなり美化表現）ネルに早速気付いたですらんぽすさんは小さいのをせこせこ追いかけていきます。ネルの身長からあの怪物を見上げたらそれはそれは恐ろしいでしょうね・・・。ご冥福をお祈り申し上げます。

さて、邪魔者が消えたところで漸くネンチャク草を採取です。根元からひきちぎるとベタベタの液体が私の清潔な手に付着します。う、我慢我慢。

これと、その辺に落ちていた手頃な大きさの石ころにくるくるーつと巻き付けまして・・・できました、素材玉の完成です！

・・・しかし本番はここから。この素材玉と、ペースト状にしたドキドキノコをうまく調合しなければなりません。ムラが出来ないよう満遍なくネンチャク部分に付着させ、形が崩れないよう握って丸い形に固めていきます。コネコネコネコネ・・・。

出来ました・・・なんかとってもグロテスクな見た目の上漬したキノコのかほりが槍のごとく鼻を突いてきます。これって成功して

いるのかしら・・・？

と、モドリ玉の鼻に鼻を近づけていたその時でした。

「ひニヤー！！もう限界だニヤー！！」

ネルの声です。本来なら無事に帰ってきたことを真つ先に祝福してあげるべきなんでしょうけど、彼の後ろにぴったり張り付く青い悪魔の姿を確認してしまったからにはそんな暢気なこと言ってる場合じゃありません。

「ひ、ひ、ひ！！こっちきちゃダメですネルー！！どっか行けーですー！！」

「そんな薄情なこと言わニヤいでニヤ！助けてくれニヤー！」

青い悪魔とのご対面までもう数メートル！このままではネルも私も食材行きですー！

まだちゃんと確認できていませんがこうなったら一か八か、モドリ玉の玉を使うしかありません。これで調合が失敗していたら潔く食べられましょう。

「ネル、早く鞆に入るんです。ゴールはもうぐ目の前ですよ！」

「ニヤ！こ、これがアイルー族の大ジャンプだニヤー！！」

どうみても非力な足で大地をおもいつきり蹴飛ばし、見事鞆へダイブイン！その時既にどすらんばすは鼻息が伝わる程の距離にまで・・・あわわわわ！

「私の調合力は世界一いい！モドリ玉、てえい！！」

地面に玉を投げ付けると途端に緑の煙を上げます。おお！これはまさしくモドリ玉の煙！

「ギャオオオン！」

最後に聞いたのはお食事五秒前のどすらんぼすの鳴き声でした。煙に包まれた私はその緑に視界を奪われ、そして意識を失ったのでした。

六、密林脱出（後書き）

近頃はシヨップで肉買えますけど、あれ何の肉なんでしょうね・・・

七、貴族主義（前書き）

今回は訓練はお休みです。新たな人物が登場し、物語の基盤が漸く整った感じになりました。

七、貴族主義

目が覚めるとそこはお布団でした。ふかふかのもこもこ、まるで綿毛に包まれているかのような心地よい感覚です。そう、ここは先日教官から与えられた私のお部屋です。

ところで確か私はどすらんぼすさんにおいしくもぐもぐされてしまったはずでしたが・・・もしかして全部夢の燃え殻で、そんな幻想の為に私は二話に渡って必死になっていたのかしら？

「おーおー漸く目が覚めたようじゃの」

教官の登場です。見慣れない金属とふさふさの毛皮でできた珍しい鎧を纏っています。ちよつと高級品に見えますね、売ったら何食分になるかしら。

「しかし驚いたぞ。おまえさん、訓練所の門の前に倒れておつたんじゃない。訓練に疲れて部屋に着く寸前に倒れたといったところかの？」

・・・ああ、何か思い出してきました。どすらんぼすさんにいだけられる寸前、自作のモドリ玉を使ったんでしたっけ。でも、モドリ玉ってベースキャンピングに戻されるって品物だった気がするんですが・・・。

まあとりあえず、密林で起きたことを包み隠さず有りのままに伝えて、あんな危険な場所に一人きりで送ったことを問いただしてやります。

「ほほう、初陣でモドリ玉を現地で調合とは・・・。お前さん、ここに訪れたときは単なるひよっこだと思っていたが、思ったよりも

ハンターとしての素質があるようじゃの」

「え、いや、それほどでもですー」

褒められて悪い気はしません。

「ところで、なんで私はモドリ玉でベースキャンプに戻らずにそのような所で倒れていたのでしょうか？」

「・・・なんだ、知らんのか？モドリ玉は使用者がその時一番戻りたい場所にとばされるんじゃないよ」

「キノコって凄い・・・」

「・・・まあ、何はともあれこれで最初の訓練は無事終了したという訳ですね。健全な食生活の為とはいえ、結構しんどいものです。月一くらいの頻度が調度いいですね。」

「ところで薬草はどうした？」

「・・・あ」

ドンドルマ、センター街。

ここは数々の露店や商店が立ち並ぶこの街最大の商店街となっているようにして、色々な国の方達がひしめき合うかの如く押し寄せています。ふわふわのコートに身を包んだ雪国の人もいれば、ゴムだか皮だか分からない素材の服を着た異国の人もいる、まさにインターナショナルな街という印象を受けます。

私がこのような場所に来たのは、観光も兼ねてお食事をするためです。もう一度いいいます、お食事をするためです。といいいますのも、先日の密林の大活躍に心を打たれた教官が私に自由に食事をしてきなさいと大量の軍資金を下さったのです。その額なんと三千ゼニー！ちよつとしたご馳走が頂ける金額であります。普段なら少しずつ日々の食事に回していくところですが、今日は特別です。頑張った自分へのご褒美なのです。

「ネルは何か食べたいものありますか？」

いつもの通り鞆からひよっこり顔をだすネルの瞳は砂漠の太陽を凌ぐ程に煌めいていました。

「ニャーは肉が食べたいニャー！脂がのつた草食獣の肉・・・アンタも食べたいニャー!？」

「ええ、それは勿論。それでは私の大好物、アプケロス料理をいただきますしよー！」

「流石社長！太っ腹ニヤー、尊敬するニヤー！」
「はっはっは、よしたまえネル君、本当のことを言われると照れるではないか！」

とまあよく分からないノリで入ったのは大通りの片隅に佇む『肉料理のドン』という看板を掲げるお店。マカライトの床にお洒落なアイスマタルの壁、テーブルは木目の美しい千年樹をふんだんに使っていて、高級感溢れる内装です。

「いらっしやいませー、一名様でしょうか？」

赤のアクセントが効いた白い衣装のウエイトレスさんがハッピースマイルで尋ねてきます。よく教え込まれているのでしょうか、お辞儀からの流れるような言葉遣いは尊敬の念すら覚える程見事でした。

「はい、一人・・・じゃなかった。一人と一匹です」

「一匹？・・・ああ、アイルーをお連れなんですわね」

「よいしょつと、鞆から失礼するニヤ。ペットお断りじゃニヤいですかニヤ？」

「いえ、うちは遠方よりいらっしやるハンターのお客様も多いので入店規制はございません。それでは一名様と一匹様ご案内です」

腰を下ろすと息つく暇もなくメニューを渡されます。同時に置かれた水で軽く喉を潤し、早速それを開いてみますと・・・

「アプトノスのレアオニオンバターソテー、ブルファンゴと山菜盛りの鉄板焼き、ガブリロースとモスのハンバーグステーキ・・・」

文字だけでも口内の唾液達がお祭り騒ぎを始めます。これが写真つ

きのメニューだったら迷わず全て注文してしまったことでしょう。

「あ、ありました。アプケロスのフィレスステーキガーリックソース！これお願いしますー」

「かしこまりました、少々お待ち下さいー」

急いでメニューを片付けますとウェイトレスさんはせこせこと厨房へ走っていきました。なんか都会って時間に厳しいですね。もっとのんびりしてもステーキは逃げませんのに。

しかし一体何ヶ月ぶりの肉になるでしょうか。

確か七ヶ月前にご近所様のハンターさんから偶然いただいたアプトノスのスライス肉が最後でしたね。アプケロスの肉となりますとそれはもう記憶から除外されるほど太古のお話であります。あの、唇で挟んだだけでちぎれてしまう程柔らかくジューシーな肉のうま味、想像しただけで唾液祭りは更に激化してゆきます。

「隣、空いてるかしら？」

不意にかけられた声に思わず身を震わせてから隣をみると、堂々と座ってメニューを眺める女性の姿。どこの国のものともつかないドレスのような服装で、顔立ちはまだあとけなさの残る・・・私と同じくらいの年齢の印象を受けます。

「ええ、まあ」

「ぱっとしない答えねえ。空いてるなら空いてるとはつきり言ってお下さらないと座っていいのかどうか判断に困りますわ」

それがとつくに座つてメニューを選んでいる人のいうことですか。

「・・・失礼しました、紹介がまだでしたわね。私は口ザリエル、わたくしこの街の貴族出身ですわ。・・・見たところあなたはこの街の方ではないようですけど、どうしてこの街に？」

初対面にも関わらずこのお嬢様はばんばん質問してきます。私とは真逆のタイプですねー、ちよつと苦手かも。

「私はシエリア。えと、ちよつと訳ありまして雪国からハンターの訓練を受けに・・・」

「ハンターの訓練！？あら、それは奇遇ですわ。実は私も今日からハンターになるために、訓練を受けるんでつしてよ」

「あら、それは奇遇ですわ」

「何か興味なさそうな反応ね」

「え、いえ、そんなことは決してはい」

図星です

「まあいいわ、でもあなた、ハンターになるにも関わらず防具も身につけてないようですけど・・・あ、カジキマグロのおさしみあるかしら」

「申し訳ございません、当店は肉料理専門店ですのでカジキマグロは取り扱っておりません」

「品揃え悪いわね。なら、このリオレウスのリュウノテール煮込みでいいわ」

「か、かしこまりました」

ウエイトレスさんの引き攣った顔が何とも痛々しいですがそれは置いてきまして、

「ロザリエルさんも防具を着ていないように見えますけど・・・」
「ロザリーでよろしくつてよ。貴女の目はふしあなかしら、この身なりはじいやに特注で作らせたれっきとした防具、リアルシリーズでっしてよ?」

こんなひらひらがいつぱいついたきらびやかな服が防具ですか・・・
お金持ちはすることが違いますね。

「お待たせしました、アプケロスのフィレステーキです」

つと登場しました今回のお話のメイン、お肉です！立ち上る湯気が極上の香りを鼻元まで運んでくれます。

「ニヤ！いよいよメインディッシュの登場かニヤ?」

今まで読まなくてもいい空気を読んで鞆に隠れていたネルがお肉の香りをこぎつけてぴよこんと顔を出します。しかし、目の前に現れるは見知らぬ女性の顔。

「・・・お友達かニヤ?」

「え、ええ。まあそんなところかも」

「あら、もうアイルーを飼ってらっしゃるの、珍しいですわね。普通ハンターは訓練を終えてからアイルーを雇うとお聞きしましたけど・・・」

そうだったんですか・・・。

「ニヤーとシエリアは深い絆で結ばれているんだニヤ。だからお肉

も半分こなんだニヤ」

「都合のいいときだけ都合のいいこと言わないで下さい！」

「あらあら、仲がよろしくて羨ましいですわ。くすくす」

ほら笑われてますー！もう帰ったらネルは三日はご飯抜きです・・・。

「まあ挨拶はこれくらいにいたしましょう、今日からよろしくお願
いしますわ」

「・・・はい？何をです？」

「訓練ですわよ。あなた、この街に訓練しにきたんでしょう？」

ああ、そうでした。ロザリーも今日から訓練と言っていましたね。

一日二日の差はあれど、同級生ということになるのかしら？

「まあ貴女がどうなろうと私の知ったことではありませんけど、せ
いぜい私の足を引っ張らないように頑張りなさい」

いちいち嫌味な言い方ですねーこの人・・・。こんな世間知らずそ
うなお嬢様娘が過酷な狩猟地でモンスターの荒波に揉まれても平気
なんでしょうか？

「こちらこそ、明日の訓練が楽しみですわね・・・」

訓練はキツイですけど、ロザリーに馬鹿にされるのはもっとキツイ
です。薬草でもネンチャク草でもどんな訓練もどんとこいです！
つ私の実力を見せ付けて驚かせてやりましょう、うふふ。

「ニヤー、うまかったニヤー」

「ああ！私の分のお肉まで食べやがりましたね！？ってこら、逃げるんじゃない！待ちなさい！」

七、貴族主義（後書き）

レアルシリーズはフロンティアに登場する防具。強化するとかなり高性能でして、私もガンナー用装備として愛用しております。フル強化すると防御は400を軽く超え、下手な剣士の顔を真っ青にさせますから驚き・・・

八、砂漠炎上（前書き）

暑い場所ってきついですね。特に昼夜で寒暖の変わる砂漠は日中にホットドリンクを持って行ってディアブロスに絶望した経験は誰にもあるのではないのでしょうか？え、暑さ無効？失礼しました。

八、砂漠炎上

先日の密林訓練は湿気と真夏の気候のおかげでネルがうなだれるほど暑かったです。とはいえ、頭上を覆い茂る木の枝、葉が天然の日傘代わりになって幾分かは堪えられるレベルだったのは事実でした。つまりところ気合いと根性、明日の食へのあくなき欲求が我が軀を満たしている限りは倒れることはなかったということです。

「あ、暑い・・・」

砂漠地帯。常に熱死と隣り合わせの砂地に容赦なく降り注ぐ太陽の光。喉を通り越して胃の水分まで奪い尽くそうとする完全に乾燥しきった空気。どちらも私には狂氣的な殺人兵器以外のなものでもありません。

「あ、暑い・・・っと」

足元が砂地でおぼつかず、危うく転倒するところでした。生肉を放置したらこんがり肉になってしまいそうな砂の海に頭からザッパーンなことになったら私のデリケートな肌が弾けとぶこと間違い無しですね。

「あ、暑い……」

「さっきから暑い暑いうるさいですわよ！私まで暑くなるじゃありませんの！」

私の後ろから暑さの不満を罵声に変えてぶつけてくるロザリー。

「暑いものは暑いんです！ロザリーだって暑いでしょう？」

「私はこの程度で……」

ウェーブがかったロザリーの髪から汗が頬を伝いぼたりぼたりと落下、砂はそれを待っていたように一瞬で飲み込んでいきます。

「暑いに決まってるよー！……ケホッ」

力の限り叫び、そしてぶざまに咳き込みます。ふふふ、いい気味です。

何故私がロザリーと共にこのような死地を徘徊しているかと言いますと、お話は今朝まで遡ります。

「肉食竜の卵採取？」

五話目と同じ展開で教官の言葉を復唱します。

「そつだ、この種の訓練は採取クエストの中で最も難易度の高いものでの、ランクアップには手っ取り早いんじゃない」

「手っ取り早いのと無茶なのは大分違う気がしますけど・・・」

私のささやかな抵抗を軽くスルーして教官は話を続けます。

「実はの、今日から新しい訓練生が加わるんじゃないよ。ちよいと準備がかかるらしくての、本人には依頼内容だけ伝えて現地集合ということにしてある。おまえさんも準備が出来次第現地に向かうんじゃないぞ」

「新しい訓練生ですか」

「そつだ、この街の高等貴族の娘さんらしくての。確か名前は・・・」

「

「あー、ロザリー・・・」

一晩の睡眠で彼女のこと、すっかり頭から抜け落ちておりました。出来ればそのまま永遠に忘れていたかったものです。

つまり教官殿の考えは、

『仲間が増えるんだから依頼の難易度上げてみようそつしよう』

という鳥並の単純思考から絞り出されたものでしょう。それがハルスさんのような超ベテランハンターさんとならいいですが、今日初めてハンターとして訓練が始まるお嬢様と共に、ですよ？薬草もまともに採取出来なかった私が肉食竜の卵なんて・・・またおっかないモンスターさんに追い回されて強靱な顎でぱっくりがいいところ
です。

「目的地はまたあの密林地帯ですか・・・？」

「いや、あそこは意外とモンスターが多いようだったからの。今回はもう少し安全と思われる場所にしておいた」

おやまあこれは意外。てっきりまたあの密林でらんらんるーさんの食欲にさらされるのかと思いました。・・・まあ何もいないとは思ってはいませんけど、せめて次は涼しい狩猟地がいいですねー。

「今回は街を出てすぐ側の砂漠じゃ。気をつけていくんじゃぞ」

「・・・はい？」

猫のタクシーに揺られること数10分、雪山でも見た黄色いテント

が砂地に無造作に立てられていました。やはり多くのハンターさんが愛用しているのでしょう、穴空き放題杭錆び放題の完全放置状態であります。

「ちょっと、いつまで待たせれば気が済むのかしら！」

その内部に設置されたベッドに堂々たる体勢で座るロザリーは、早速文句を惜しみなく飛ばしてきます。やっぱり、彼女と今日の依頼をこなさなければいけないんですね……。

「……まあいいですわ。こんな訓練さっさと終わらせて、私がどれだけ優れているのかを教官に見せ付けてやりましてよ」

「あら、頼もしい限りですね。肉食竜が出てきても知りませんよー」

「あなた、教官のお話をお聞きにならなかつたの？この狩猟地は比較的安全で訓練にうってつけ、モンスターなんてでるはずありませんわ」

密林の時も全く同じ教官の手口にまんまと引っ掛かり、モンスターさんと生死をかけた死闘を繰り広げる羽目になりましたことはまだ記憶に新しい話です。

「ま、いざとなったらネルの爆弾で私が一掃して……って、あら？」

鞆を開けてみると、いつもその住人のように踏ん返り返っているネルの姿がありません。おかしいですねー、夜逃げかな？

今回も片手サイズの剣と盾を借りてはいますがみなさんには分からないでしょう。

他のハンターさんの用に斬り上げ斬り下げを器用に繋ぎ合わせた華麗なる連続攻撃が私たち一般市民にとってどれだけ難しいことでしょうか。まずその重量です。見かけによらずふんだんに重金属を用いられたその刀身はただでさえ重い上、左手に常に抱える盾にも同じだけの重量があるため振り上げるだけでも翌日筋肉痛が襲いそうです。更にそこから斬りつけ、盾を利用したコンボ・・・もう骨折モノですね。

「例えモンスターがでてきたとしても、お父様から譲り受けたこのボウガンさえあれば楽勝ですわ」

随分と重そうな鉄の塊を何とか肩にかけ、自慢げにそのボウガンとやらを披露してきました。そのままバランス崩して潰れちゃえ。

「国宝級の武器職人に作らせた渾身の一品、その名もアルギユダオラですわ！あなたのもつへっばこ片手剣とは格が違いましてよ！」

なにやら凄いボウガンだとアピールしたいようですが、私には名前を聞いたところでその強さなんてわかりません。それに、例えばいくら高性能な武器を所有していても使いこなせなければ銀玉鉄砲同然です。下手したら私が危険な目に遭う可能性だってあります。

「なんですかその不安げな目は・・・いいわ、このボウガンの力がどれほどのものか、この手で証明して差し上げましてよ！」

中折式の銃身を展開させ一発、弾をこめます。その展開速度はお世辞にも速いとはいえないですけど、一つひとつ的確に作業をこなしているようにもみえます。まさか、本当にこんなビックな武器を扱うことができるのでしょうか・・・？

「よく見てなさい、これがこのボウガンの力ですわ！」

ズガン

銃口が爆炎を上げ、弾丸とは思えないほど巨大な弾が超高速で射出、砂漠の彼方を目指してものの数秒で見えなくなってしまう。むむむ、確かにこれはすごい……。

「意外と予想外にやるじゃありませんか……？」

一瞬でも彼女を評価しようとした私を一生悔いることでしょうか。テントに突っ込み無残にも破壊して仰向けになっているロザリーの姿を見てしまったからには。

「あの、何やってるんです？死体ごっこですか？」

「こ、こんな反動の大きいボウガンなんか扱えませんかー！」

確かにボウガンの性能だけなら証明できていましたけどね。

「ふ、ふん。まあいいですわ。どうせモンスターになんて会いつてありませんわ」

それがフラグだとも知らずに易々と口にしてくれますねー。私だつて出来ればモンスターさんなんてごめん被りたいところなのに。

「ま、肉食竜の卵と言う時点でもでないとは思いませんけど。とりあえず探しましょうか、教官の話によると確か岩肌が剥き出しになっている洞窟にあるようですが・・・あの岩山かしら」

遙か遠方につつすらとですが、砂漠が盛り上がっているような場所が見えます。ぱっと見ただけでも恐ろしいほどの距離があり、さらには道が全く整備されていないため猫タクシーが利用できない模様です。・・・つまり

「徒歩ですね」

言葉に出してみるとがっくりと肩が落ちます。その思いはロザリーも同じようで、ベッドに座り込みすっかり休憩モード。今日のところはこれくらいで勘弁してあげて撤収しましょうかね。

「・・・肉食竜の卵だなんて高価なものをどーして私たちが運ばなければなりませんの！？もうこんなところで無駄な時間を過ごすのは我慢なりませんわ！帰りましょうシエリア」

「高価・・・？高価って、どれくらいの価値があるんですか？」

「はい？詳しい話は知りませんが、ハンターしか得ることが出来ない上に人気のない依頼ですわ、状態にもよりますが、一つ七百ゼニーはいただきますことよ」

ひ、ひ、一つ七百ゼニー！？そそそれって、十個で七千ゼニーってことですよな？あわわわわ、それだけの大金があればガノトトスの活け作りも夢ではありませんよ！

「さあ行きますよ！レッツ卵採取！」

「ええ？急にどうなさったの！ってちょっと、お待ちになって下さ・

・あぁあれえええ！」

というわけで、漸く冒頭部分に繋がる訳であります。岩山はまだまだ遠く彼方、歩けど歩けど広がる砂、振り向けばすでに汗だか何の体液だか分からない水分を滝の用に流し続けるロザリー。

「ロザリー……大丈夫です？」

「……」

返答がありません、ただの屍のようですね。

「仕方ありません、残念ですが彼女はここに置いていきましよう。あなたと共に戦った日々を私は決して恐らく多分そこそこ忘れません、どうぞ安らかにお眠り下さいまし」

合掌し、供養完了です。彼女の犠牲を無駄にしないためにも私はより一層強い決意を胸に、一步を歩みだすのでした。

「って、勝手に殺さないで下さいましー！……ケホケホッ」

ぶぎまですね、ふふふ。

八、砂漠炎上（後書き）

回想が半分以上を占めるといふ事態。しかし肉食竜の卵って大きい
ですよー。目玉焼きにしたら何食分になるでしょうか・・・？

九、池魚之殃（前書き）

魚を食べると頭が良くなるって歌がありましたけど、あれって本当なのでしょうか？

九、池魚之殃

地底湖に巣くう魚竜、ガノトトス。

彼の存在は数多の漁業被害を招き、ドンドルマの街は近年経済的大打撃を浴びせ続けられている。

定期的にギルドは狩猟依頼を設けてはいるものの、彼の凶体の大きさをを用いた圧倒的な力と狩猟環境の不遇さから引き受けるハンターはいまひとつ伸びる気配がない。その肉は美味とされ、一部の高級料理店や貴族の食卓に並ぶことはあるものの、武具の素材としては余り日の目を見ることはないという事実が依頼受注者数の停滞に拍車をかけているのである。

「あいつがガノトトスカ・・・初めて見たが、やはり大きいな」

まだ成熟しきっていない男性の声が地底湖にこだました。男性は赤い鱗を何層にも重ねたいかにも硬そうな鎧を纏い、独り言のように呟く。

「怖じけづいたならさっさと帰れなのです。あんなデカブツ、ミニミニ一人でも楽勝なのです」

独り言を拾いあげるのはまだ幼い少女と呼ぶに相応しい声。自らをミニミニと称した少女の黒く美しい長髪は、蝶など昆虫の羽を模ったであろう防具の腰部分まで撫でている。その風貌はまるで地底湖を舞う蝶そのものでも言うべきか。身長は、一般男性の背丈ほどある隣の男性の半分程しかなく、彼らが親子だと言われても不思議がる者はいないだろう。

「いいのか？それじゃ任せるとするかな」

「・・・ガルトも一緒に戦えなのです、アホ」

ガルトと呼んだのは、恐らく男性の名だろう。はいはい、とガルトは生返事を返し、背負っていた大剣を握りしめた。

「ふー、涼しいですねー」

散々灼熱の砂地獄を歩き続けた私たちの苦勞の甲斐あって漸く卵が眠るという洞窟までやって参りました。日の光が届かず、道の脇を冷水が流れているこの場所はまさに天然の冷蔵庫と言ったところでしよう。食料も保存がききそうです。

「涼しいと言いますか、少し肌寒くありませんこと？あなた、そんな軽装でよく平気でいらっしやいますわね」

「雪国出身ですからね、寒いのは慣れっこです」

流石に雪山の吹雪の中は寒かったですけど、それに比べればこの程度快適の範疇です。

「私だって、別に我慢出来ない訳ではありませんわ！・・・勘違いしないで下さいまし！」

誰も我慢出来るかなんて聞いていませんけどね。

ギョオオオオオオ

遠くの方でモンスターの叫び声がします。今回は随分と早いご登場となりそうですね。この前のどすらんぽすさんとは違う声だったようです。何が潜んでいるんでしょう？

「い、今のお聞きになって？モンスターですわ！早く逃げないと大変なことになってよ！」

「ハンターの訓練なんですから、モンスターと対峙するのは当然じゃないですか。まだ卵一つも見つけていないのに、帰る訳にはいきません！」

「や、やけに強気ですわね・・・何か秘策でもあるんでございまして？」

「ないです」

ずっこけるロザリー。まあ見つかってしまったらその時はその時で

す。戦うもよし、逃げるもよし、ロザリーを餌にするもよし、とにかく今は卵が優先です。万が一出会ってしまったらその時に考えましょう。

洞窟内を探索して10分、両脇を冷水が流れる今までの道が途端に途切れ、開けた空間が現れました。道は無くなっているものの冷水は流れを止めず、絶え間無く前の分子を後ろの分子が押ししていきます。

「シエリア！あれを見て下さいまし！」

いきなりロザリーが大声を出すものですから慌てて彼女の指さす方に振り向きますと・・・いました。恐らくあれが先ほど聞いた鳴き声の主でしょう。

「思ったより規格外のサイズですね・・・。あれ、なんです？」

「私に聞かれても困りますわ。ヒレやエラがあるところから、魚の一種だとは思いますが・・・」

「魚ってあそこまで大きくなると足が生えるんですね、不思議」

流水は先へ繋がる湖へと流れこみ、飛沫をあげます。その湖を守るかのように、何メートルあるか分からない巨大な魚は文字通り立ち塞がっていたのです。わお、大迫力。

ギャオオオオオオオオ！

鳴き声、というよりは悲鳴にも似た叫びをあげます。それもそのはず、いかにも柔らかかそうなお腹の部分を人間の背丈くらいの長さの大剣が貫いたのですから。・・・ちよつとえぐい。

「あのお腹の下で戦ってるのはハンターさんですよね？」

「わ、わ、私に聞かれても分かりませんことよ！あんな巨大モンスターに踏み付けられたら一たまりもありませんわ！」

先の大剣を突き刺したのは二十歳前後の男性ハンターさん、少し離れたところから弓を振り絞るのは小さな体の女性ハンターさん。後者は私より幼いように見えますが・・・まあそれは置いて。

「困りましたね、奥に進むにはあのお魚の後ろにある道だけみたいですよ。見つからないように突破出来ると思います？」

「・・・足には自信ありませんわ」

まったく、近頃のお嬢様はだらしないですね。そんなことではハンターになんて何年かかってもなれませんよええはい。

「奇遇ですね、私も自信ないです・・・」

ですがここで諦める訳にはいきません。そののでっかいお魚さん程度でガノトトスのお刺身を諦めると思ったら大間違いですよ！

「あのハンターさん達に加勢しましょう。あの正体不明の魚さえ倒してしまえばきつと卵ももう少しですよ」

「し、しかしあんな大きなのを相手にどうやって私達が相手を・・・」

「ふふふ。ちょっといい考えがあります」

男、ガルトの大剣は既に動きを鈍らせ、ガノトトスの屈強な甲殻に容赦なく弾き返されていった。かろうじてその巨体から繰り出される攻撃は避け続けているものの、明らかに息があがっている。直撃するのもはや時間の問題であろう。

「っー、まいったな。予想以上にしぶといやつだ。このままだと・
」
「泣き言言ってる暇があったら手を動かさせなのです。少しはミリリを見習えなのです」

ガノトトスの攻撃が届かない範囲から次々と首に矢を撃ち込んでいくミリリ。時折ガノトトスの口から放たれる高水圧光線も少し左右にずれるだけで余裕で回避、ガルトを罵倒する余裕も十分にあるようだ。

「全く、遠距離武器が使えるお前がうらやましいよ……っ」と

巨体を活かした尻尾の薙ぎ払いを間一髪足元に回避し、冷汗を流した。ガノトトスも相当疲労しているようで、致命傷となりうる攻撃さえ当てられれば恐らく仕留めることも出来るだろう。しかし今の彼にそんな余裕はない。せいぜい足を薙ぎ払って体制を崩させるのが精一杯であった。

「ガルト、矢がなくなっただのです。後は頼んだのです」

「な、なくなっただって……予備の矢は用意してないのか？」

「そんなもの用意するお金があったらとっくに使っているのです。契約金が払えなくて仕方なく契約金不要のこの依頼を受けたのを忘れたのですか、この鳥脳」

「それもそうだが、にしたって俺もかなり限界が近いしなあ……せめて回復薬くらい余ってないか？」

「矢も買えないのにそんなものがあるはずないのです。そんなことも分からないのですか、このアホ」

言葉とは反し、表情を曇らせるミリ。

彼女とて事の次第を理解していない訳ではない、自分の矢がなくなっただけ、接近職であるガルトにかかる付加は単純に考えても二倍、もしかしたらそれ以上になるかもしれない。特に大剣は、仲間が作ってくれた際に豪快な一撃を加える言わば一撃必殺の武器。彼女もそれはよく理解していて、だからこそ少しでも自分にモンスターの注意を引きつけようと弱点部位のみを集中砲火していたのである。

「……危ないなら逃げるのも手なのです。ガルトに死んでもらうては明日からご飯も食べられないのです」

「逃げる、か。確かにこいつは水辺から離れられないだろうから逃

げるのは簡単なことだろうが・・・使った道具は戻ってこないぞ」
「分かってるならさっさと倒せなのです、このドアホ！」

このまま帰れば一文無し、新しい矢も買えず、剣を研ぐ為の砥石だつて買えない。なにより今日の食事ができない。それだけは二人とも是が非でも避けたかったのだ。

「しかし、どうすれば・・・」

「必殺、目潰しボールです！！」

突如聞こえてきた雄叫びともとれる声に（ガノトトス含め）一同が振り向くと、少女は全力で『それ』を投げた。どうみても非力な体から投げられた『それ』は案の定ゆるやかなスピードで弧を描くが、振り向きざまのガノトトスの顔面にジャストミート、ピンク色の粘液と異臭がびつちりのこびりついた。

ギャ、ギャオオオオオオオ

巨体に似合わぬ小さな瞳を完全に覆い尽くし、ガノトトスはじたば

た暴れ出した。どうやら視界は殆どゼロに近いようで、ガルトがいくら近づこうとも陸に乗り上げた魚のようにビチビチはねるだけ。この状態を狙うのは例え疲労し、武器の切れ味が落ちた状態でもたやすいことであった。

腹に重い斬撃を一撃喰らわせると、悲鳴をあげたガノトトスはやがてはねるのをやめ、息絶えた。

「か、勝ったのか」

「辛勝なのです。調子にのるなです」

そういうミミリの表情にも漸く安堵の色が浮かんた。横たえるガノトトスの死体を丁寧に剥ぎ取りながら、ふとガルトは思い出す。

「そうだ、君達さつきは本当にありが……って、あれ？」

先のボールを投げしてくれた少女に礼を言おうと振り向くが、既に彼女達の姿はなかった。

「何空気にお礼しているのです。大量に剥ぎ取って全部金にするから、丁寧に剥ぐのです」

「お前も手伝ってくれよ。大きすぎてかなわん」

「……生臭いのはイヤなのです」

「何とかやりすごしましたねー。やっぱり私って天才？」

再び細い通路を進みながら自らの才能に浸ります。ネンチャク草とペイントの実を調査したペイントボールでモンスターの視界を奪いその隙に進む。我ながら非の打ち所がない作戦ですね。

「でも、帰りはどうなさるおつもりなのかしら？またあの巨大魚に出くわすかもしれませんことよ？」

「その時は・・・その時です。ほら、見えてきましたよ！あれが卵じゃないですか!？」

大きな卵が大量に並んでいて、スーパーの卵売り場を彷彿とさせる光景です。幸い周囲にハングリーモンスターはいらっしゃらないようです、問題が一つ。

「・・・これまたでかいですねー。これじゃ二人合わせても六つが限界かも・・・」

「・・・一人三つ!?何を言いなさるんですの?そんなに持てっこありませんわ!って、持ててますわ・・・」

一つ七百ゼニーです、できれば全部持ち帰りたいところですが、さすがにベースキャンプとここをもう一往復する気にはなれませんか。三つで我慢しましょう。

「さ、これさえ手にいれればこんな場所に長居は無用です、とつとと帰りましょう」

そうして私達は砂漠の大洞窟をあとにするのでした。来る途中出会ったモンスターさんは何故か帰り道では見かけませんでした。風邪かしら？・・・ま、そんなことはどうでもいい今日この頃なのでした。

九、池魚之殃（後書き）

ガノトトス武器は優秀な水武器になるんだぞー、需要あるじゃないか！という批判は受け付けています。どしどしどしぞ。

幕間、紺碧に染まる伝説（前書き）

ストーリーを進める上で書いておきたいおまけの文章です。特別おもしろいものでもないのに読まなくてもいいです。

幕間、紺碧に染まる伝説

昔、一人のハンターがいた。

若くして一つの村を壊滅の危機から救ったという噂は瞬く間に大陸全土に轟き渡り、遙か海を越え、異国の大地さえも震撼させた。

大陸を襲来した超巨大龍、老山龍。砂塵の大都市に壊滅的被害を及ぼした峯山龍。いにしえより聳える龍の巣くう塔に突如として現れた全ての龍の祖、ミラボレアス。そして、数多の村を崩壊へ導いた覇龍アカムトルム、崩龍ウカムルバス。

伝説とされた彼らの存在をことごとく討ち滅ぼした伝説を超越した逸話は、もはや大陸で、いや、全世界で知らぬ者など誰一人としていないであろう。

だが、そのハンターの姿を見たものは不思議と誰一人としていないという。

知る者がござって隠蔽しているのか、そもそもそのような人間は存在しないのか、それを確信する者はいない。

真相は深い闇の中。にも関わらず大いなる伝説は未だ途絶えず、人々は次に巻き起こる災厄を彼が打ち払うと信じて止まないのだ。その事実が、彼がいかにほどの功績を上げ全世界に貢献したかを確固たる真実として裏付けているのである。神を讃える信仰に酷似していると言えるかもしれない。

「それで、現状はどうだ」

草木も眠る丑三つ時、数える程しかない家屋の内たつた一軒つつすらと明かりをとす家。男のものだろうか、肩幅が広くがたいのい

い人影が窓越しに浮かんでいた。

「
」

男に応える何者かの声、余程音量を抑えているのだろうか、その内容も声色も明確ではない。

「そうか・・・お前には世話をやかして悪いな。だが・・・」

「
」

星一つ見えぬ暗黒の空、何者かが全ての光を拒んでいるようにも見える。

「私は行かねばならぬのだ。例え、どんな大切なものを犠牲にしよ
うとな」

「
」

「・・・英雄は常に孤独でなければならぬ。故に英雄は強い。何故だかわかるか？」

「
」

黙り込む相手を男は笑い飛ばす。強風で屋根が軋む音が止むと、男は咳ばらいを一つすると再び話を進める。

「いずれわかる、お前にもな」

いつしか明かりは消え、そして夜は更けていった。

十、最終訓練（前書き）

いよいよ訓練も最後。今回はその導入部分です。とんでもない訓練がシエリア達を待ち受けているようですが・・・？

十、最終訓練

先の砂漠での訓練は私の活躍もあり大成功をおさめることができました。持ち運んだ卵も立派なものだとお褒めの言葉をいただき、一人2100ゼニーと交換して下さいました。とにかくこれで数日間の食は安泰です。

「ニヤー、おかえりニヤー」

部屋に着くとすぐに出迎えてくれたのはネル。私よりも私の手ににぎりしめるお金の方に目がいつております。

「おかえりニヤー、ではありません。どこへ行ってたんですか、大変な訓練だったんですよ?」

「ちよつと急な急用が出来て遠征してたニヤ。お土産のマタタビだニヤー」

「急じゃない急用はありません。それとマタタビは結構です。食材になりませんかからね」

猫にも急用とかあるんですね。人間には見えない猫の社会があるのでしょうか、やっぱり黒いのかしら。

「シェリア、おるかー？」

この掠れきった声は教官です。つい先程訓練から帰ったばかりなのですが、もう次の訓練かしら。いないフリしましょうかね。

ガチャリ

「おーおーシェリア、元気そうだね」

「まだ返事してませんけどー！プライバシーの侵害ですけどー！」

「がっはっは、まあそう怒るでない。お前に客人がきておるぞ、ほれ、入りなさい」

私の意見を全力無視して教官は、その客人とやらを招き入れました。一人は私より多少年上と見受けられる青年、もう一人は明らかに私より幼いであろう少女。どちらも防具を身に纏っていることから恐らくハンターさんなのでしょうけど・・・

「初めてまして、俺はドンドルマを拠点にハンターをやっているガルト。んで、こっちの小さいのが相方のミリリだ」

「小さいの言うななのです。ミリリがいなかったらガノトトスも討伐出来ないクセに」

「それはお互い様だろう。というか、ミリリがいても負けそうだったけどな」

「矢があればあんな魚余裕なのです。お金のやりくりが出来ないガルトが悪いのです」

「仕方ないだろう、誰かさんが事あるごとに卵サンド勝手に買ってくるんだから。せめて安い奴にしてくれよな」

「卵サンドは飛竜の卵以外認めないのです。これだけは譲らないのです」

この愉快的兄妹（？）劇場、終演の兆しが見えないですね。

「・・・あの、もし？私に用があるのでは？」

水をさすと漸く私に向き直ってくれます。完全に私の存在忘れられてましたねこりゃ。

「あーそうだった。さっきの礼をしにきたんだ」

「さっき？」

はて、私はこのお二人にいつ会いましたっけ？ちよつと時間を遡ってみて・・・

「その顔、俺達のこと完全に覚えてないって顔だな」

「え？いえ、そんなことありませんよ？いやこれ本当」

「砂漠の洞窟で俺達が危ない目にあつたところをあんたがペイントボールを奇跡的な使い方をして助けてくれた。思い出したかな？」

あー、そういえばそんなこともあつたような気がしますね。つまり私の大活躍によって救われた命が恩返しをしにきたと、そういうことですか。やっぱり恩は売っておくべきですね、御礼って何でしょうか？食材だとネル共々歡喜狂喜に見舞われるのですが。

「礼をしたいんだけど金欠中でなにも買えなかったんだ。そこで、一週間あんたたちの手伝いをしようと思ってな」

・・・はい？

「このミミリが仲間になるのです。ありがたく思えなのです」

そうきましたか・・・。確かに人数が増えれば訓練も幾分か楽にはなるでありましょうが、私一人で決められる話ではありません。ネルはいいとして、ロザリーとは話しておくべきでしょうね。

「その話、乗らせていただきましてよ！」

二人の間を強引に押し分けて顔をだすはワンピース姿のロザリー。なんと神出鬼没な・・・

「いつから聞いていたんですか・・・」

「最初からずっとですわ。それより何を渋ってらさるのかしらシエリア。仲間が増えるということはそれだけ個々の負担が削減されるということ・・・つまり、楽ができてよ！」

ズビシッと人差し指を突き出して満足げな表情。結局楽がしたいんかい、と思わず出そうになった言葉を飲み込み、違う言葉を模索します。

「おお、それじゃ一週間よろしく頼むな」

「よろしくなのです」

ということ彼らが仲間になったのですが、私は嫌な予感がしているのです。

決して彼らの実力を疑っている訳ではありません、もっと根本的な問題です。ロザリーが同行するようになったときの某氏の思考、覚えていらっしゃるでしょうか？その奇々怪々で人知を越えた思考が私達を砂漠へ追いやったように、此度もその危険性を危惧しているのです。

「話も纏まったようだの、そろそろ次の依頼について話したいのじやが・・・」

きました。二度に渡って死地に送り飛ばした教官の次なる訓練です。

「今回は実際にハンターも交えておるからの、最高難度の訓練を用意しておる。そのかわりこの訓練を見事こなすことができたなら、晴れて訓練所卒業ということにしよう」

・・・卒業ってそんな手っ取り早いものなんですね。まだハンターのノウハウをこれっぽっちも手に入れていないような気がするんですが・・・。

「それで、依頼内容は何なんですの？」

「まあまあ慌てるでない、今日はゆっくり休むとよい。明朝、広場に集合じゃ」

戦力になりそうなハンターさんお二人を何故か私の部屋に受け入れて、三人（と一匹）の食事タイムです。今日の献立は長寿ジャムと米虫を程よく煮込んだおじやです。具材一切なし、味付けはジャムと塩のみ、おかずは勿論ありません。

「何という極貧料理ニヤ・・・」

「失礼ですね、節約上手と言ってください」

「分かる、分かるぞ金がないその気持ち。俺もどれだけ節約に節約を重ねたことか・・・」

「シエリアの料理はまだマシなのです。ガルトのは安い少ないますいと三拍子揃っているのです」

「ひ、酷いなあ」

「というか何で私は彼らの食事まで作っているのでしょうか・・・。確か、彼らは私に御礼をするためにここへ来たはずですが、これではまるで逆ではないですか。もしかして新手の詐欺？これで現地でも役に立たなかったら二人仲良く箱詰めにして返品してやりますか」

らね。

「しかしあんた、随分若いのにハンターの訓練とは偉いな。何か訳ありだろっ？」

唐突にガルトが聞いてきます。まあミリリを連れてくるあなたに言われたくはないですけど。

「乙女には秘密の一つや二つあった方がいいんです。それよりミリリの方が私より小さいではありませんか」

「・・・まあ、俺らにも色々あってな」

「乙女には秘密の一つや二つあった方がいいのです」

う、言い返せません・・・。見かけによらずしつかりした女の子です。これで狩りもこなすっていうのですから、実は人間によく似せた竜人族なんじゃないかしら？

ま、私も詮索はあまり好きではありませんし、それ以上聞くことはしませんでした。どうせしょーもない秘密なんでしょうけど。

「おーおーよく集まったの。それでは早速だが、本日の訓練の内容を説明する。よく聞くんじゃないぞ」

明朝、広場に集まった四人をいつものしわくちや顔で迎えた教官が早速切り出します。風もない穏やかな朝、何だか今日はいいいことありそうですよー。

「場所は火山。あらゆる生命を拒む言わずとした死地じゃ」

・・・。

「そこでお前さんたちには飛竜、リオレウスが零すという竜のナミダをとってきて貰おうと思う」

・・・ほわえ？

「知つての通り、リオレウスは一村を壊滅の危機にさらす程の危険なモンスターじゃ。涙を手に入れるにはある程度奴を疲弊させねばならぬ」

・・・何言ってるんでしょつかこの脳みそがショートしたおじいさんは。

リオレウス？流石の私も聞いたことくらいはあります。恐ろしい炎をペッペペッペ吐き出してアプトノスさんをコゲ肉にしてしまう超ド級モンスターであります。その強靭な翼で大空を我が物のように支配する姿から、空の王と呼ばれたりもしています。

「リオレウス……？俺達でも討伐したことはないなあ。訓練の域を超えているような……」

「狩獵が目的なら。だが今回の目的はあくまで涙の納品じゃ。……ハンターとなつては依頼とは関係ない大型モンスターと出会うこともあるだろう。この訓練はいざそのような事態になった時、冷静かつ的確に状況を判断し、行動する力を身につけるのが目的なのじゃよ」

「……えっと、それはつまりリオレウス以外にもモンスターが出現するフラグなのでは」

「くれぐれも気をつけていくんじゃぞ。いってこーい」

ああ、なんか終わりましたね主に私の人生が。そんな危険なモンスターをどうやって疲弊させろというんですか。

「お前達んところの教官、結構とんでもないな……」

「……まったくですわ。危なくなったらしっかり守って下さってよ……」

ロザリーもうんざりしてますし、ネルだって鞆の中でまたうんざりして……

「あらま、またいない」

……ネル、狙ってませんか？

「ほら、何ボサツとっつ立ってるのです。さっさと行くのです」

ミリリにスカートを引っ張られ、泣く泣く私は死地に向けて歩みを進めるのです。

十、最終訓練（後書き）

訓練で火山とかどうみても詐欺ですね。がんばれしえりあ（棒読み）

十一、王者疾走（前書き）

火山で根性スキルが発動したと同時にクーラードリンクの効果が見られる経験、あなたにもありますよね・・・

十一、王者疾走

マグマに抱かれ、地獄の業火に身も心も焼き尽くされるまさに死地、火山地帯。耐熱対策を怠っては決して踏み入ることを許されない世界でも指折りの熾烈な環境なのは、恐らく皆様もご存知でいらつしやいましょう。ベースキャンプに着くなり脇を流れる溶岩、息をすゐるたびに咽びそうになる程の熱気、これは流石に言わざるをえません、馬鹿かと阿呆かと。

「ひー、暑いですわ！こんなところで狩りをするハンターの気が知れませんか！」

「実際好き好んで火山にくるのは鉱石ハンターくらいだな。ましてや訓練生が来るなんて前代未聞だよ」

「なーんですってー!？」

教官は私達を育てたいのか殺したいのかどっちなんでしょうね。殺したいならいつそ刃物でザクツとやってくれた方がこんなところで野垂れ死ぬより数倍マシなんですけど。

「しっかしリオレウスの涙たー無理難題もいいところだな。取りあえずはリオレウスを探さないと始まらない訳だが・・・どこにいると思うミミリ」

「知ってたら苦労はしないのです。自分達で探しだし、依頼を為し得てこそ訓練の意味があるのです」

「探し回っている間にゲームオーバーにならないことを祈りましょ
う・・・」

ということ、私達は二手に別れてリオレウスを探すことにしました。両チームに現役のハンターがついていた方がいいというガルトの提案で、東方面の探索はロザリーとガルト、西方面の探索は私とミミリという振り分けに。どちらかが見つけ次第角笛を吹き、もう一方の組に知らせるという寸法です。

ベースキャンプを抜けて洞窟に入ると早速獰猛な肉食竜さんたちに挨拶（毒液攻撃）されました。見た目はいつだかのらんぼすさんにそっくりでしたが、見るからに『私、毒持ってますよー。危険ですよー』と主張しているような赤と黒の鱗に包まれております。あのぺっぺしてる毒にかかったら昇天確定でしょうね。

「・・・鬱陶しい雑魚なのです」

それら毒らんぼすさん（私命名）を的確に弓で射抜くミミリ。流石は本場ハンターさん、体は小さくても腕は確かなようです。みるみるうちに私達に群がっていた毒らんぼすさんはお掃除されていきます。

「流石ですねー、高い飯で雇った甲斐がありましたよー」

「高いかどうかはともかくとして、ハンターならこれくらいできないと生計が立てられないのです。そんな貧弱な片手剣じゃすぐに切れ味が落ちて弾かれるのがオチなのです」

「大丈夫です。私戦えませんか」

「・・・組む相手を間違えたのです」

「ロザリーと組んでも大差ありませんよ」

とか何とか言っているうちに毒らんぱすさんを全滅させた私達ですが、勿論本来の目的を忘れた訳ではありません。あくまで私達の目的はリオレウスとの接触であり、その涙の奪取なのであります。火山地帯ということもあり、あまり長い間留まることはできません。教官の話ではモンスターとの抗戦が長引いて全身に大火傷を負って帰って来たハンターもいるそうです。こんがり肉になるのはモンスターだけにしてほしいものですね。

なので出来ることなら早く見つけたいのですが、火山は思ったより広いです。その上相手は空を自由に移動できるときいています、地上で羽休めをする彼をそう簡単に捉えられるとは思いません。

「・・・ちよつといい考えが浮かびました」

「いい考え？それはリオレウスを効率的に探し出す方法なのですか？」

「その通りです。まあでも、ちよつとミミリの協力が必要なんですけどね」

「・・・？」

頭に分かりやすいようにクエスチョンマークを浮かべるミミリを横目に、私は持参したバツクを漁ります。

「そのでっかい骨はなんなのですか？」

「ふふふ、以前レストランでお食事した時のお肉の骨です。まだ肉の香りが残ったこの骨を使えば、肉食竜のリオレウスなら一発で嗅ぎ付けてきますよ」

「……本物の馬鹿なのです」

「今にきますって……ほら！」

「ほらって……」

ギヤオオオオオオオ！！

「ほらほら、きましたよ！『わーい、美味しそうな骨だぞー』って言うてますよ！」

「……これは悪夢なのです」

しかし初めてリオレウスさんと対面しましたが、やっぱり大きいですねー。先日戦ったとすらんぽすさんより遥かに巨体の持ち主です。こんなの涙を頂戴するなんて、無謀もいいところな気がするんですが……。

ブオオー、ブオオー

「とにかく角笛は吹いたのです。あとは向こうの二人が合流するまで奴を疲弊させる方法を考えるのです」

「疲弊させるってあんなでかいのどーするんですか！逃げ回ってスタミナ切れにでもさせるです？」

「あんなのが相手じゃこっちのスタミナが先に尽きてクエスト終了なのです。逃げつつダメージを与えられれば……なので

す」

ダメージと言いましても見るからにカツチカチの鱗で全身包まれている彼相手では疲弊は愚か傷一つつけられる自信がありません。とりあえず援軍、ロザリー達がくるまで何とか凌ぎたいところですが、生憎今日は便利アイテムなんて持ち合わせていませんし……。

困り果てて辺りをきよろきよろ見回しているうちにリオレウスさんはミリ目掛けて大突進を繰り出します。ただでさえ図体がデカイ上にその速度は流石飛竜、五十メートルハンドを貰った百メートル走でもボロ負けする自信がありますよ、えっへん。

その回避不能とも思える攻撃を、軽い身のこなしでリオレウスさんの通り過ぎるギリギリで足元から離脱。目標を失った哀れな飛竜はズサーという効果音を出しながら地面に滑り込みます。それをチャンスとばかりに一発、二発と矢を撃ち込むミリリ。

「おおー、鮮やかなお手並みですねー」

「相手の動きを見極めればこれくらい余裕なのです」

ギャオオオオオオオ!!

「……どうやら矢の方は殆ど効果なさそうですね」

「お金がないから高い弓も、火力をあげる強撃ビンも買えないのです。奴の装甲は見ての通り半端ない、こんな弓じゃ低刺激ツボマツサージがいいところなのです」

「せめて高圧マツサージくらいにはならないですかね？」

「論点が違う気がするのです……次、そっちに行つたのです」

ゆったりと指さした先には私に向かって再度突進を試みるリオレウスさんの姿。こここいつは結構やばいかもです。全力ダッシュです
！！

「背を向けて逃げてどうするのです！ 奴と直角の方向に逃げます
！」

「おお、なるほど。てええい！」

ミミリの言う通りに急カーブをすると、猛スピードで突進するリオレウスさんは急には曲がれないらしく先程と同じようにズサーします。はっはっは、これは愉快愉快。

と余裕をかましてしますと即座に体勢を立て直したりオレウスさんが今度は私の方を向いて大きく息を吸い込みます。深呼吸かしら？

「火炎ブレスがくるのです。とっとその場から逃げた方がいいのです」

ま、マジですかー！ 緊急回避緊急回避、R + x ボタンですよー！！ 大きく息を吸い込んだ後、私に向けて吐き出されたのは毒らんぼーさんの毒液とは比較にならないサイズの火炎球でした。慌てて回避していた私の髪の毛を掠め、地面に着弾と同時にネルの小タル爆弾なんて比にならない威力の大爆発が巻き起こります。火柱が上がリ、噴煙に包まれ、メラメラと燃え上がる地面は無惨にもえぐれちゃってます。これが直撃したら・・・ひいいい！

「どうするんです？ まだロザリー達が到着する気配はありませんし・・・このままでは本当に私達のスタミナが・・・」

「・・・」

「って、あれ？ミミリ？」

返答がありません。ただの屍・・・というお約束を言っているような場合ではありません！

「・・・あ、ごめんなのです。暑さで、体調が・・・」

「ま。クーラードリンク飲まなかったのですか？」

「お金が・・・なのです」

貧乏生活って見るだけでも精神が擦り減ってしまいますね・・・。

「うう、私も後一本しかありませんが・・・確かここらへんにしま
い込んだ気が・・・」

その時の私は迂闊でした。ミミリの異変について焦ってしまい、唯一にして最大の危険因子を完全に度外視してしまったのです。

ギヤオオオオオオオ！！

火炎プレスを吐いてからすっかり忘れ去られていたリオレウスさんがミミリに向かってまたもや突進を開始！うなだれるミミリはそれに気付く様子もなく、ただ私のクーラードリンクを心待ちにしているような顔をしています。ま、まずいです！

「ミミリ、後ろです！」

「・・・!？」

とりあえず叫んではみましたが、暑さで体力を消耗しているミミリにそれを避ける力はなさそうです。

さて、ここで彼女を殺す訳にはいきません。私が一人になったらスタミナ切れ確定即死確定です。そうやってはおいしく頂かれるところの話ではありません。

彼女を助ける術は？あの巨体の動きを封じる方法は？首をぐるりと一周し、目に飛び込んできたのは・・・

「・・・あれは！」

私はリオレウスにも負けぬ猛ダツシユ（超誇張表現）でその植物に近づきむしりとる。そしてミミリの目の前に迫る巨体に敢然と立ち塞がり、その『実』を怯むことなくぶん投げる。

「グ・・・グギャオオオオオオ!!!」

悲痛の叫びをあげるリオレウス。頭部に直撃、粉碎した『それ』は悍ましいオーラを燦然と解放し、あの屈強なるリオレウスを浸蝕した！鱗を剥がし、甲殻を朽ちさせるその波動は火山を跋扈するマグマの熱気をも凌駕せんと広大な大地を支配する。

「飛竜よ、お前は強い。だがその強さに溺れ、人間の知恵を蔑ろに

したお前の負けだ」

「グ、グギイイイ」

「……さらばだ、親友よ」
とせ

そして私はもう一つ、懐に潜めたその『実』に力を込めて投擲した。

「グギヤアアアア……!!」

とまあ、ただリオレウスさんが怯んでくれただけなんですけどね。

「ささ、今のうちですよミリリ。ちゃっちゃんとこれを飲んでください
い」

漸くバツクからとりだしたなけなしのクーラードリンクを無理やり
飲み込ませ、一先ずリオレウスさんの視界から逃げるように後ろへ
回り込みます。取りあえず時間稼ぎはできそうですね。

「・・・あ。今は・・・？」

「もう大丈夫です、あの恐怖の霸王リオレウスは私が打ち払いまし
た、えっへん」

「でも、どうやって・・・」

胸をしゃんと張って言ってやりますとも。

「龍殺しの実です」

龍殺しの実とは、昔から竜が忌み嫌うと伝えられる植物です（勿論
食用です）。

どうやら竜達の嫌う成分が詰まっているらしいですが、それが私達
には酸味成分となって舌に伝わるようでして、私の山菜料理の調味
料には欠かせない存在です。ハンターさん達が『また竜殺しが余っ
たよ・・・』と私にゴミのように押し付けるものですからどこで採
取できるかなあと考えていましたら、火山でしたか・・・。まあ自
分で取りに来るのはしんどいですからいいのですけれど。

「・・・」

「ふふふ、どうしたんです？少しは私の才力に気がついて尊敬心が
湧いてきましたか？」

「・・・シエリアお姉さま、ありがとございますなのです」

・・・はい？

どういうことでしょう、今私、なんか名前に変な語尾をつけられて呼ばれたような？

「あ、あのー。クーラードリンクに何か悪いものでも入ってました？」

「そ、その、かつこよかったのですお姉さま！武器も使えないのに知識と勇気だけでミリリを助けてくれるなんて・・・感激なのです。だから今日から、お姉さまと呼ばせて下さいなのです！」

「ちよ、ちよ、ちよっと！お姉さまって・・・」

「嫌なのですか？それならエレガントシエリア様と」

「ひーひー！何かどつかで聞いたことあるからそれはダメですー！」

「それでは、お姉さまと呼びますのです！」

急に態度が変わったというレベルではありませんね・・・。まあ尊敬されるのはいいことなのでしょうが何故でしょう、妙にむず痒い感じがいたします。よもや自分の身の安全の為に助けたなどと口が裂けても言えませぬね。

ともかく戦局は一時安定しましたが、まだ油断なりません。龍殺し

の実は先の二つで取り尽くしてしまいましたし、困りましたね。

「お任せ下さいなのでお姉さま。清涼飲料水を得たミリは百人力なのです！」

漸く私達を捉え振り向きリオレウスさんに次から次へじゃんじゃんと矢を放つミリ。目にも留まらぬという言葉がありますがこのことを言うんでしょうね、放つ腕の動きが見えません。流石のリオレウスさんもこれはたまらなかつたのでしよう、ギャンギャンと喚き声を上げながら上空へ退避していきます。

「おおーい、ミリー！」

謀ったようなタイミングで後方よりガルトの声。ロザリーも同行しているようです。漸く到着した援軍に歓喜半分憤り半分で

「おお、よくきてくれやがったですー！」

「・・・あれ、恨まれるようなことしたかな？」

「たった今リオレウスに逃げられたのです。間が悪いのです、このノロム」

「ずいぶん言いようだね・・・。まあちょっと遅れたのは認めるけどさ」

「暑くて・・・歩みも進みませんことよ・・・」

ああ、原因はロザリーですか。それは何と言いますか、仕方がない

ですね。

「ともかく、リオレウスさんを追いましょう」

うだうだしていてもクーラードリンクの効果が薄まるだけですからね。私達一行はリオレウスさんの逃げた方角、更に火山の深部を指して歩みを進めるのであります。

ああ、日焼け止め塗っておけばよかった……。

十一、王者疾走（後書き）

このあと、いよいよ強敵リオレウスとの決戦が始まるとか始まらな
いとか・・・

十二、火山炎上（前書き）

別の小説の更新が終わったので漸くこちらの更新再開です。いつになく熱い展開にご期待下さい（誇張表現あり）

十二、火山炎上

火山地帯、頂上付近。

下層に比べて暑さは更に増し、持ち込んだ携帯食料とロザリーが干物みたいになっちゃっています。

「何なんですこの暑さ……。こんな場所によくリオレウスは住む気になりましたね……」

「うう、クーラードリンクの効果も薄れてきたみたいですよ……。早いところ見つけないと」

「発信機によるとこつちの方角で間違いありませんのですお姉さま。もう少しの辛抱なのです！」

「は、発信機？」

「ミミリは昔からポイントボールのことをそう呼んでいるんだ」

「ああ、なるほど……」

この娘、いつの間にポイントボールなんて投げたんでしょう……。とりあえずもう少しと聞いてモチベーションは上がってきましたけど、問題はリオレウスさんに出会ってからなんですよね。疲弊させる方法、今のうちに考えておかねばなりません。

「さて、敵さんのお出ましのようだな」

「……はい？」

火山頂上の更に上空。優雅に舞うその巨影は間違いありません、私達を散々痛め付けたあげくちゃっちゃんと撤退した悪徳飛竜……

「リオレウス！」

豪快に翼を羽ばたかせ、思わず後ずさりしてしまう程の突風を巻き起こしながら大地へ降りるその様はまさに空の王と呼ぶに相応しいものでした。

もしかして私達、とんでもないのを相手に回してます？

「く、流石にでかいな。いけるか、ミニリ」

「先の戦いで矢が残り僅かなのです。足止め程度にしかならないのです」

一足先に一戦交えている私とミニリは既に満身創痍、戦う余力なんて残っちゃいません。ロザリーもこの暑さにやられているようですし、ガルトも万全とは言えない様子。

対するリオレウスさんはまるで戦闘があつたとは思えない程びんぴんしていらつしゃいます。私にもあれくらいの余裕が欲しいです……
・ああ暑い。

「今回ばかりは食べられてしまいそうですね……」

「諦めては駄目なのです！お姉さまはミニリが絶対に守るから心配

「いらないのです」

「おお、なんと頼もしい。これは泣き言をいつてる場合ではありませぬね、なんとしてもリオレウスさんから涙をいただく方法を考えなければ……。」

「ギャオオオオオオオオ！」

「くるぞ！ロザリー！」

「ああん、暑いのに動きたくありませんわー！」

文句を言いながらもリオレウスさんの突進を脇にすりぬけて回避に成功するロザリー。流石のリオレウスさんも四人相手では攻撃目標が定まらないようで、逃げ惑う私達を目で追うのに必死なご様子。勿論私達も負けず劣らず、突進や火炎ブレスを回避するのに相当のスタミナを消費。まともな攻撃を入れることもできず、事態は早くも泥沼の様相を呈してしまってます。

「これだけ攻撃を避け続けているにもかかわらずリオレウスさんったら元気ですねー。私ったらもう、倒れそう……。」

「ミミリも、ちょっと息が苦しくなってきたのです。何か手を打たないと、結構やばいかもなのです」

それは皆さん同じ状況でした。水分も底を尽き、食料もないという状態で私達はすでに20分以上回避行動に徹しているのです。正直どれだけリオレウスさんを疲弊させているのかも分かりませんが、このままいけば先に力尽きるのは間違いないこちら側でしょうね……。暑さに倒れ、モンスターさんの餌になって自然分解されるのが

オチです。ううん、畏の一つや二つでもあればいいのですが。

「シエリア！行ったぞ！」

「はひ！？」

私としたことが油断していました。ガルトの声で漸く振り向くも既に遅し、リオレウスさんの巨大なお顔はもう目の前まで迫っています。おーのーリオレウスさん、話せば分かるデース！（混乱中）

「お姉さまには指一本触れさせないのです！」

側面から矢の襲来です！それらはまるでリオレウスさんが吸い込んでいるかのように頭部へヒット、私を押し潰そうとする勢いが一先ず止み、頭を振るいます。この隙を利用しない手はありません。

「あ、危なかつたですー」

「でもこれで矢を使いきってしまったのですよ……」

いよいよピンチ到来といったところでしょうか、残る頼みの綱はガルトの大剣ですが、ミミリのサポートがないこの状況下ではせいぜい盾くらいにしかならないことでしょう。なんせあの巨体ですからねー、下手に斬りにかかったら尻尾でビターンされるのがオチです。うう、万事休すとはこのことですね……。

「もー、このままではこちらが全滅しておしまいですわよ！何か妙

策はありませんの!？」

「妙策と言われましても・・・あ」

一つ、忘れかけていたことを思い出しました。先程から逃げるのに夢中でリオレウスさんと戦闘することは皆さん考えていたようですが、何も彼を屈服させるのが目的ではないのです。私たちの目的はただ一つ、それは。

「・・・何とかなるかもしれませぬ」

たまには私だつて活躍するのです、なるべくそう主張するような口ぶりです。別に、今回の件を自分の手柄にして後で報酬をねこそぎいただくようなことは考えてませんよ? いやこれ本当。

「何とかって、この状況でどうやって・・・」

「こつやるんですよ、てえい!」

私はリオレウスの前に落ちるよう、『それ』を力いっぱい投げました。未知の物体の飛来にリオレウスさん、一瞬ビビります。

「なあ、シエリア」

「はい？」

「なんだ、あれ？」

「やだーガルトったら、見て分からないんですかー？」

「・・・いや、分かるからこそ聞いているのだが」

私がぶん投げた物体、それは支給品の最後の残りである携帯食料でした。本当は後で皆さんに隠れてこっそり食べる予定だったので、背に腹はかえられませんからね。

「そうですね！せっかく疲労させようとしていますのに、敵に塩を送るとはどういうことですか！？」

「ふふふ、皆さん。当初の目的を忘れてはいませんか？」

私の一言で皆我に返ったかのように動きが止まりました。そう、私たちの目的は涙の納品なのです。リオレウスさんを疲弊させることでもなければ、ましてや討伐することでもないのです。

「そうか、あまりの暑さに目的を見失いかけていたんだな・・・」

「・・・言いたいことは分かりましたわ。しかし、それが携帯食料の投擲と何の関係がありましたか？」

その問いには、ミリミリが弓を畳みながら答えました。

「飛竜全般は特殊な行動をするときに涙を落とすのです。リオレウ

すが涙を落とす条件・・・それが食事なのです」

流石に私たちに攻撃を避けられ続け多少なりとも疲弊していたのでしよう、リオレウスさんは私の撒いた携帯食料にとびつきました。予定通りむしゃむしゃと食料を貪るリオレウスさんの目からは光るものが。そう、これこそが飛竜達の神秘の雫、竜のナミダなのです。液状の涙は瞳から離れると一瞬で結晶化学し、地面に落ちるところころ私の足元まで転がって静止。これで高額賞金は私のものですー！

「流石シエリア、冴えているなあ。これで戦闘が出来たらどれだけ優秀なことだろうね」

「う、それは言わない決まりですよ・・・」

確かに戦闘に関して役立たずなのは認めますけど。

リオレウスさんは未だお食事中。下手に追撃をかけて怒らせるのも怖いですし、さっさと退散するのが吉ですね。リオレウスさん、まいどありがとうございましたー！

そんなことを考えていたのと、唸るような地響きが聞こえてきたのはほぼ同時でした。

「きゃ。なになに何ですかこの音はー！」

その音は、まるで何か近づいてきているかのように徐々に大きくなっていきます。・・・こういつときの嫌な予感ってやつは何故かことごとく的中するんですよね。もう予感が外れるとは言いません、せめて最小限の被害にとどまってくれれば！

グガアアアアアア！！！！

耳をつんざくような咆哮に思わず両耳を塞ぎます、直で聞いたら本気で鼓膜パーンしますよパーン！
流石のリオレウスさんもその声にはたいそう驚いたご様子で、あおんと鳴きながら咆哮の主を向きました。

岩山のようなゴツゴツしたボデイ、鉄柱のように強固な尻尾、そしてハンマーのように発達した光沢する顎！その顎を灼熱の大地に二度、三度とたたき付けると馬鹿みたいにでかく響く金属音が再び鼓膜を刺激します。こやつは鼓膜キラーでしょうか？

「な・・・ウラガンキンだつて！？」

ガルトが珍しく叫びます。何ですかその舌噛みそうな名前のモンスターは。あんな顎でガツンとやられた日にはペーパーシエリアRP

Gが開始されてしまいます。いやぁ本当冗談抜きで。

「む、向こうにも何かいましてよー！」

これまた叫ぶロザリーの指さす方向は溶岩が惜しみなく流れていました。なんだ、何もいないじゃないですか。全くお騒がせ娘ですね。ロザリーは。リオレウスさんとうらなんちゃんただけでも手一杯だといいますのにもう一体出現だなんてまさかまさか・・・

グギヤアアアアアア！！

溶岩の海から海竜でも跳ねたかのようにその声の主は大ジャンプ！次の一瞬には地上に大揺れを起こしながらその巨大なボディを着地させたのです！その姿はまさしく溶岩竜、触ったら火傷じゃ済まなそうですね・・・。

「アグナコトル・・・」

今度はミリリが啞然としながら言います。なるほど、奴はアグナコトルというのですか。一日に二匹もモンスターを覚えられるとは何と素敵なことでしょうあはははは。頼みますから次回からは勘弁して下さいあははは。ああ、次回まで辿り着けるといいなあ・・・。

「こいつは何の冗談だ……。大型モンスターが三匹、いずれも高レベルときた」

「ア、アホ！つべこべ言つてないでなんとかするのです。お姉様に何かあつたらどうするのです！」

「暑い上にこの展開はあんまりですわー！あんなの相手にできっこありませんことよ！」

「う、涙は手に入れたのですから、後は逃げるだけです。逃げ切るだけならまだ私達にも勝機が……」

グギャアアアアア！！

……

絶対無理！！

リオレウス以外のモンスター出現フラグがまさかこんな強烈なものになるとは、こんなことなら閃光玉の一つくらい調合しておくべきでした。後悔先立たず、ですね。クーラードリンクも着実に効果を薄めてきていますし、武器だつてあんな重戦車みたいな装甲が相手じゃぬかに釘がいいところです。今回死んだらいつもの何倍も教官

を呪ってやりますよ……。

「諦めるのはまだ早いニヤー！」

訓練中に久々に聞く、この声は！

「ネル！随分遅い登場ですね」

「こつちにも色々と事情があるんだニヤー！そんなことより、早いところこの場から逃げるんだニヤー！」

「逃げると言われてもどうやって……」

正面にはリオレウス、山上からはうらなんちゃら、溶岩の海にはアグナコトル。後一手で詰みというこの状況下、どーやって逃げろというんですか。

「今まで30分以上も逃げ回ってきたのに何言ってるニヤー！モンスターを討伐するのは難しいけれど、逃げるだけなら勝機はあるニヤー！」

「……何故30分以上逃げ回っていたこと知ってるんですか？」
「ニヤー！？そ、それはだニヤー……」

ネル、今日の晩御飯抜き決定。

でも、ちよつと目が覚めた気もします。確かに相手が増えたからつて取り乱しすぎていたのかもしれないね、数だけ見ればまだこちらが有利な訳ですし（勿論実力はモンスター連合の方が数千倍上でしょうけど）。・・・ふう、ちよつと深呼吸で落ち着きましょう。

「ネルの言う通りです。ここは何ととも突破して、美味しい晩餐と生活費を勝ち取るうではありませんか！」

咽ぶような熱気を堪え、必死の演説です。

「・・・ふん、仕方ないですね。あなたについて行って差し上げますわ」

「ああ、どうやらそれしかなさそうだしな。やっつみるか」

「ミミリがお姉様を守るのです、心配いらないのです」

そして、火山での逃亡劇が幕を開けるのでした。

十二、火山炎上（後書き）

トライよりウラガンキンとアゲナコトル登場。初見は流石に恐ろしかったですが、やはりと言うか宿命というか今では乱獲の対象に・・。

十三、四面楚歌（前書き）

漸く更新出来ました。読んで下さっていた方には大変ご迷惑をおかけしました・・・

十三、四面楚歌

前回ネルの言葉にのせられ意気揚々と逃亡を開始したのはいいのですが、数分も経たないうちに悲劇は起こりました。

眼前にはそそり立つ巨大な壁、振り向けば空を我が物顔でぶいぶい飛び回るリオレウスさん、顎をガンガンさせながら近寄ってくるうらなんちゃら、口をかつぱつぱさせSF映画顔負けのレーザーを照射してくるアグナコトルさん。背水の陣なんてことわざがありますけど、今がまさにその状況でございます。

「レーザー照射が来る！南東方面だ！」

「ウラガンキンが転がってきますわ！シエリア、そっちにいきましょうよ！」

「リオレウスの火炎ブレスなのです、上空に警戒なのです！」

激しい敵の猛攻を殆ど間一髪で避け続けてはいるものの、退路が敵によって塞がれている為どうにも逃げようがありません。

「こ、これでは丸焼きになってしまいますわ！何とかならないんですの!？」

「厳しいな……。唯一ベースキャンプへ続く道は完全にアグナコトルに塞がれている。一か八かで脇を抜けようにもリオレウスやウラガンキンの追撃はまず免れないだろうし、どうしたものか」

絶体絶命です。最近何度もこの言葉が脳裏を過ぎる気がしてますが
気にしていたら更に更に意気消沈しそうなのでやめておきます。
ここは脳を働かせて私シエリアがすぱっと解決策を導き出すのが今
までの流れ。今回もご多分に漏れず、解決してみせようではありません
せんか！まずは軽く現在の状況を整理してみましよう。勝利をつか
み取るには状況把握は大事ですよね。

訓練@火山地帯戦力一覧

○ハンターサイド

・シエリア

（知力高、他はお察しを・・・）

武器：ベータナイフ

防具：なし（私服）

・ロザリー

（財力高、対応力中、体力技術共に激低）

武器：アルギュウダオラ（ただし扱えない）

防具：リアルシリーズ

・ガルト

（体力中、技術中）

武器：アッパープレイズ

防具：クックシリーズ

・ミニリ

（体力低、技術中）高、矢残量0）

武器：クイーンブラスター

防具：パピメルシリーズ

○モンスターサイド

・リオレウス

（攻撃激高、強度高、速度高、その他もろもろ高）

・ウラガンキン

（鼓膜破壊激高、攻撃高、強度高、速度高、とにかくでかい硬いうるさい）

・アグナコトル

（攻撃激高、強度高、速度高、レーザー危険超危険！）

・・・何でしょうねこの歩兵軍対重戦車みたいな状態は。歩兵ならまだ火器があるからいいですよ、こちらはガルトの大剣（大盾？）以外は完全に丸腰、武器もなければアイテムも殆ど使い果たしてしまいました。残っているものといえばネルの爆弾と先の角笛、それに密林で作ったきり余ったままの素材玉くらいでしょうか。ああ、

せめて最後にリオレウスの尻尾煮が食べたかった（超弱気）。

「・・・おや？」

背にした絶壁からふわりとした感触が伝わってきて思わず疑問符を漏らします。はてこんなゴツゴツした岩場にこんな感触が存在したかしら？と振り返ってみますと、そこには絶壁を元気に伝って自生する植物の姿が。空腹の私にはなんとも素敵な食料です、しかし残念なことに調理器具を持ち合わせていない為火を通すことができません。溶岩に突っ込んだら・・・流石に焦げますよね。

と、そういえばこの植物見覚えがなくもないですね。確か・・・稀にハンターさん達がおすそ分けしてくれたことがあったような？おひたしにして食べたような古い記憶が走馬灯のように蘇ります。

「・・・あ」

そして、一つの結論にたどり着いたのです。食べられるかどうかを必死に調べ、おかげで得ることの出来たこの植物の情報を、そして活用法を！

「南東より再びレーザー照射だ！・・・って、どうしたシエリア？」
「ええ、まあ、ちょっといいことを思いついたんですね」

調査は私の得意分野です。主にモドリ玉調査の成功で確信に至りました、間違いありません。

さて、そろそろ目の前の植物のタネ明かしをしましょうか。このツヤ、質感、どれをとってもこの植物は罨や虫あみなんかの調査で有名なツタの葉です。天ぷらにして食べるのが一般的ですが、個人的にはひき肉を詰めて煮込んだロールツタの葉がオススメです。まあ私は肉の部分を米虫で代用していましたが、それでもしなやかなツタの歯ごたえがくせになったものです。

ってそんなことはどうでもいいですね。今回トラップツールは持ち合わせていないので罨としては使えませんし、その辺の骨と調査して虫あみにしたところでこんな火山の奥地では虫なんて採れたものじゃありません。さて、どうしたことでしょう。

・・・以前モドリ玉を作った時に素材玉を調査しました。実はその余りがまだポシエットに残っているのですよ！こんなこともあるのかと天才っ娘シエリアは事前に用意していたのであります！（たまたま調査で余ったのがポシエットに張り付いていたとかじゃないですよ？本当に）

・・・この素材玉がどうした、ですって？ふふふ、実はこの素材玉、ツタの葉と調査することによってツタの葉に含まれる発煙成分が増幅、これひとつでひとエリアの視界を限りなくゼロに近づけることが出来るのです。その名もけむり玉！・・・まんまですね。

「こうやって切り込みを適度にいれつつぺたぺた・・・」

「活け花なんてやってる場合じゃなくってよー！」

「これが活け花に見えますか・・・。違いますよ調査です。この危機を打開する、唯一の切り札といったところですね」

ふふんと鼻を鳴らしたりなんかしてみちゃいますがそんなことよりこのけむり玉に最初に目があったのはミリリでした。

「・・・けむり玉！流石お姉様冴えてるのです！これがあればこの状況も脱することができるかもしれないのです！」

「この草の塊がか・・・？」

「ガルトはもつと調合の勉強をするのです、ドアホ」

相変わらずのミリリです、まあこの技術の結晶を草の塊呼ばわりするんですから当然ですね。

「一発勝負です。通路を陣取っているあの溶岩魚をおびき寄せたらすかさずけむり玉を使用、彼の脇を猛ダッシュです！」

「分かりやすい作戦だ、どちみちそれしかなさそうだな」

「今日は厄日ですわ・・・生きて帰れたら豪華ディナーをご披露いたしますわよ！だからなんとしても逃げてくださいますし！」

「それでは、いくのです・・・！」

連絡用以外にもモンスターの注意を引き付ける効果のある角笛、ミミリの唇にそつと触れ、そして私は非力な腕から繰り出される渾身の力でけむり玉を投擲したのです。

ブオオオー・・・

角笛の音が響き、溶岩魚さんがこちらに向かって突撃してきたのほぼ同時、私の視界は真っ白な霧に遮られ・・・

そこからの記憶は曖昧です。時折聞こえてくる雄叫びや熱線の衝撃音に身を震わせつつ、倒れそうになるまで走りました。喉は熱気に蝕まれ、常に激痛が伴いました。それでも、それでも命は大事なもので私は走り続けなければならなかったのです。視界は霞み、足もふらつき、今倒れようかというまさに運命の選択を迫られていたその時です。

「ここまでくれば大丈夫だな・・・全員無事か？」

「こっちは問題・・・ないのです。全然・・・疲れてないのです」
「に、二度とこんな訓練は受けませんわ・・・」

三人の声です！さらに薄れてゆく視界にその姿とベースキャンプが流れ込んでいきます。・・・もしかして私達、逃げ切ったのでしょうか？

「シエリアは無事・・・ではなさそうだな。しかしまあよくここまで走ってこれたもんだ」

「流石お姉様なのです！冷静な判断力、強靭な持久力、私のお姉様は立派なハンターなのです！」

「ははは、ふふ・・・もう、死んじゃう・・・」

その後、翌朝までベッドで寝込んだのは言うまでもありませんでした・・・。

十三、四面楚歌（後書き）

登場人物の装備をどさくさに紛れて書いてみました。ロザリーは前
一度紹介してましたね。

十四、商売繁盛（前書き）

>これからは雪天城と同時に更新していきますので、どっかよろしくおねがいします。（2/10）

あの、その

ごめんなさいorz

十四、商売繁盛

私の目の前にごちそうが並んでいました。ビフテキ、お造り、野菜、フルーツ、もう抱きしめたくなくなるような光景です。

早速フォークで頂こうと思ったのですが不思議や不思議、おいしそうな食材達は私がフォークで狙いを定めた途端にその場からすると横に抜けていってしまいます。そのうえくすくすと私を嘲笑い始めたのです。再び突き刺そうと狙いを付けますが、刺さるすんでのところでひよいと避けられてしまいます。むむむ、この食材ちゃん回避性能でも持つてるのかしら……。

なんにしても食材ごときがちよこざいな！おとなしく私に食べられればいいものを。私は、いよいよどんな食材でも逃さず口へ運ぶことが出来るという伝説のフォーク、シエロツールによってまずは一番に私を嘲笑ったビフテキをブスリと突き刺し……

おはようございます。窓から陽射しが差し込んで、今日もいい朝で

すね。朝食の準備でもしようかしら・・・はい？ご馳走が逃げていく話？そんな食欲に駆られた夢を私が見る訳ないじゃないですかーやだなあもううふふ・・・。

「お、目が覚めたか」

ふと耳を掠めるのはガルトの声、寝起きでびよびよの私の頭にはそれがいい起爆剤になりまして、びよーんとベッドから跳びはねます。

「なな、なんで私の部屋にあなたがー！」

「何でって、訓練を手伝う為にここを借りてるんじゃないか・・・ま、とりあえずその様子なら大丈夫そうだな」

・・・あー、そういえばそうでしたね。先日の火山の地獄ですつかり頭から抜け落ちていましたが・・・他に部屋なかったんですかね。

「そうだ、起きたらすぐに中央広場にくるように教官が言ってたな」「教官がですか？」

恐らく訓練の結果についてでしょう。ナミダもしっかり持ち帰りましたし今回は文句のつけどころもないはずです。

「うーん、とりあえず食べそこねたピフテキを頂いてから・・・」

「おーおーよくきたのシエリア」

朝ごはんを目一杯食べてから重役出勤してきた私とガルトを教官はいつものしわくちな顔で出迎えました。既にロザリーとミリも到着している様子です。

「うおっほん。今日は無駄話は無しじゃ。早速本題に入ろうとするかの」

そう切り出すと教官は鞆から一枚の紙切れを取り出します。まさか、新しい訓練の契約書とか言うんじゃない・・・

「・・・シエリア殿。貴殿の訓練での成績を認め、ここにハンター育成所ドンドルマ支部の育成過程終了を認定する、以降も貴殿がハンターとして庶民の生活に貢献することを切に願っておるぞ」

手渡された紙には教官が読み上げた言葉がそっくり記載されている他にでかかど判が押されていました。つまり・・・これはその・・・

「卒・・・業？」

「ああそうじゃ、本当によくやったのお、たった三つの訓練で卒業したのは主で二人目じゃ、素晴らしい！」

やりました、訓練開始から一週間足らずでもう卒業です！不正な献金とか真つ黒な取引は一切ありませんよ、いやいや本当に。それも現役ハンターさんのお手伝いがあったとはいえ卒業最短記録タイらしいじゃないですか！流石私、やはりあらゆる面に才能が溢れていたということですね！

「シ、シエリアが卒業・・・？私もほぼ同期に訓練を始めましたけど、私はまだなんですの？」

「うむ、ロザリエルはちと卒業するには決定力にかけるので。火山での訓練をこなした点は大いに評価すべきじゃが、なんせまだ二つの訓練しか終わっておらん。またシエリアのような目を見張るような活躍もしておらんしの」

「う・・・そ、それはそうですけれど・・・」

やはりハンターとしては私の方が一枚も二枚も上手だったということですねふん。ロザリーはもう三年くらい教官の下でびしびし指導されるがいいです。

「さてシエリアよ、これで晴れて卒業ということになるが鍛練を怠るでないぞ？その証書をギルドに提示すれば今まで以上の難易度の依頼も請けられるようになる。自分の腕をゆっくり磨いて、焦らず上を目指すといい」

「分かってますよ教官！つまり高い報酬の依頼もバンバン請けられるということですよね！」

「ああ、まあ、そうともいうかの」

明日の生活費がかかっているのです、腕を磨くうんぬんの前にお金

を稼いで豪華な食事にありつかなければなりません。報酬を武具に使うなんて以つての外ですよ。とりあえず今朝の夢のような食事にありつきたいところですね。

「部屋は明日別の訓練生に引き継ぐ予定じゃ。今日中には退去するんじゃぞー」

・・・あれ？もしかして厄介払い？

かなり駆け足な流れで訓練所を退去させられた私は特別やることもなく、先日のナミダを売却したお金を手にドンドルマの街を放浪することになりました。まーすぐにでも村に戻って依頼をこなしてみるのがいいんですけどね、せっかく訪れた大都会をこれっぽっちも味わってないまま帰るのももったいありません。別に依頼受けるのが面倒とかそういうのではありませんよ？

「お姉様と買い物なのです」

「・・・で、何でミリがついてくるのですか」

「ガルトがロザリーの訓練の付き添いで沼地に行ったのです。だからミリはお姉様の付き添いなのです」

「なのですって、私はテキストにぶらぶらしようとしているだけですよ?」

「おっと、そいつは感心出来ないニヤ」

鞆からひよっこり顔を出すのはネル。重用な時に限って姿を現さない不思議アイルーです（にににに）

「そ、そんな素敵な笑顔をしないで欲しいニヤ・・・」

「何を言ってるんですかー、笑顔は元気の源じゃないですかー、にににに」

「そ、それよりニヤ!」

「無理やりスルーですか」

「まとまったお金が集まったなら狩りにいく準備をするニヤ! 装備が自宅にあってもアイテムなんかは今のうちに買っておくといいニヤ」

「あら?なんで家の装備のこと知ってるんですか?」

「ニヤ!?そ、それくらいアイルーの情報網ですぐ伝わってくるニヤ!」

「・・・ああ、訓練の時にいないと思っただらそんなこと調べていたんですか、にににに」

「・・・と、とにかくだニヤ! 明日のご飯の為に準備は大事だニヤ、アイテムを買いに行くニヤ」

アイテムですか・・・。確かにこれから依頼をこなして生計を立てていく手前下準備は大事なことです。幸いネルの言うとおり自宅に

は父の装備が山のように余っていますから武器は必要ありません。あ、でも防具はサイズが合わないでしょうから買うべきですかね。まあ村では雪山の依頼くらいしかないのでしょうからマフrofを一式揃えれば事足りるでしょうけど。

「ところでそのアイテムとやらはどこに売ってるんですか？」

「街の中央に大きなお店があるので。ミリリはいつもそこを利用しているのです」

「なるほど・・・では試しに覗いてみますか」

というわけでやってまいりましたのはドンドルマ中央街のハンターズショップ、看板にはでかでかと赤字で『カトーナノカドー』と書かれています。この店一つでポケケ村が埋まってしまうような程の敷地です、流石都会やることが違います。

早速店内に入りますといきなり店員とおぼしき男性の方が営業スマイル全開で近寄って参りました。

「いらっしやいませ・・・これはこれは街の英雄、ハンター様方ではありませんか！本日はまたどういったものをお探しでしょう？」

初対面にも関わらず英雄扱いしてきますよこの店員さん。

「依頼を請ける為の下準備だニヤ、薬や罠なんかあるといいニヤー」
「おやおや可愛いアイル様。さようでしたらあちらの雑貨フロアに当店自慢の価格で全て揃っておりますが、よろしければご案内致

「しましようか？」

「あ、えーっと、それじゃ・・・」

「結構なのです。自分で回るのです」

強気の態度のミリミりに店員は一步後ずさり、一礼だけするとそそくさと退散してしまいました。

「・・・随分毛嫌いしてるんですね」

「案内なんかさせたら余計なものまで買わされるのです。買物は自分ですばやく済ませるのが基本なのです」

「そういうものですか・・・」

都会の商売はよくわかりません。これだけお客さんもきて繁盛してるなら接客なんて手を抜けばいいのです。村の雑貨屋のおばさんなんて呼んでも出てこない方が多いというのに・・・ま、あの方に関してはもう少し愛想というものを知った方がいいとは思いますがどね。

さて、ハンターと言えばまずは何が必要でしょうか。もしかしたらあなた方の中にも私のような超が累計30個程つくくらいの初心者ハンターがいらっしやるかもしれませんし、おさらいは大切なことです。勿論私はパーフェクトな女性ですからそれくらいわかってはいますけど万が一を無くすのも立派なハンターの行為だと思いませんか？そうでしょうそうでしょうそう思いますよね。

「でー、何から買えばいいですか・・・」

すると、今まで私の肩にちょこんと乗っかっていたネルがくるくると空中3回転を決め

「ずばり、まずは罾を買うべきだニヤ。アンタのような新米ハンターは大型モンスターと鉢合わせたらひとたまりもないニヤ、そこで役立つのが束縛系罾なんだニヤ」

「そ、そくばくけい・・・？」

「モンスターの動きを一時的に止めることができる・・・落とし穴、シビレ罾が該当するのです。その猫の言う通り、対大型モンスターでは心強いアイテムなのです」

「ニヤーにはフランネルって名前があるんだニヤー！」

ぴよこぴよこ跳びはねるネルは置いておきまして、確かに罾ってやつは重要みたいですね・・・。とはいえあまり数は買えません。確かにリオレウスの涙の報酬額はなかなかのものでしたが、このうち最低でも80%は食費にあてる必要があります。食費が一日700z（ネルの餌代込み）と見積もっても3日持てばいい方ですからね。

「へいいらっしゃい！おやおや可愛いお嬢ちゃん方、今日はまた何を求めでい？」

罾売り場専門フロアに入るや否や暑苦しいことこの上ない声が私達を出迎えて下さいました。肩幅が広くがたいの良いおじ様で、血色も良好。・・・ただ、髪の毛は大分残念なことになっております。

「何って、ここは罾専門フロアなのです。他に何を求めるのですかこのアホ」

「ミリって誰にでもこんな態度してるんですね。」

「おうおう誰かと思ったたらガルトの連れの嬢ちゃんじゃないか。今日はあいつはいないの？」

「あいつは訓練の手伝いに行ってるのです。今日はお姉様と一緒に買い物だから邪魔したら承知しないのです」

「お姉様！へえ、あんたがお姉さんかい。こいつはまたミリちゃんに似て綺麗だねえ」

「あら、やだ、そんなことはありませんわよおほほ」

軽い誤解を招いてる気がしなくもありませんが、この際どうでもいいですね。

「さ、お姉様。さつさと買って別のフロアも見に行くのです」

「まーまーせっかく来たんだ。ちょうどついさつき新作の罾が届いたんでさあ、見ていくだけならタダだぜい？」

「タイムイズマネーなのです」

ミミリの制止を振り切り、おじ様は雑に梱包された罾らしきものを複数運んでまいりました。包装用紙をまた雑に破り捨てるとそこには見覚えのある形、依然父がよく携帯していた落とし穴と酷似した見た目です。

「ただの落とし穴じゃないかニヤ。これのどこが新作なんだニヤ？」

「へへっ、聞いて驚くなよ？こいつの内部には大タル爆弾3個分の威力の爆薬がしこんであるのさ。設置は通常の罾と変わらずで、モンスターが引つ掛かると同時に爆発するスグレモノなんだぜ」

「ほー、そいつは凄いですね。うまくいけば自分の手を使わずとも大型モンスターを討伐することが出来るかもしれないってことですか。」

穴に嵌まっている間も攻撃出来るようにするならボウガンの使用が最も効率的でしょうね。ネルの爆弾と組み合わせれば更に強力に・

「今なら大特価、なんと2599Zで販売だ持ってけ泥棒!!」

「めちやくちや高いじゃないですかー!!!」

真面目に運用を検討していた私が馬鹿らしい・・・。

「おう、ダメかい？そいじゃこつちのはどうだ、400Zで大型モンスターを粘着穴へ嵌めるその名もネンチャク落とし穴！普通の落とし穴より効果は割増で値段も手頃ときたもんだ。こいつあ買わねえ方が勿体ねえってよう！」

「・・・アンタにしてはまともな品を提示するのです」

「おいおいそいつぁーないぜミリちゃんよお。俺はいつだって大まじめだぜ？こと接客に関してはな」

「どの口が言うのですか、どの口が」

ミリリがまともな商品とレットルを貼るくらいですし、本当にいい品なのかもしれません。メジャーなシビレ罠よりは若干割高になっ
てしまいますが、聞くところによると普通の落とし穴より強力だそ
うですし、効果対コストはピカイチですね。

「あー、じゃあこれにします。それとトラップツールもあればいく
つか・・・」

「へいまいど！嬢ちゃんいい買い物したよ！名前はなんていうんだ
い？」

「はひ？・・・あー、シエリアっていいまふ」

私が名前を告げた途端、おじさんが突然怪訝な表情になります。あ

れ、私なにか悪いこと言ったかしら……。

「……あーすまんすまん！そんな引き攣った顔しないでくれよシエリアちゃん。あんたの名前どっかで聞いたことがあるような気がしたもんだからー、な！」

「え？私はおじさんと会うの初めてだと思えますが……」

「どうせ更年期障害かなんかなのです。気にしなくてもいいのです」

私の知り合いにこんなゴニョゴニョな頭の方はいらっしやらないと思いましたが……。

「こんなところにいつまでもいたら何買わされるか分からないのです。さっさと買って帰るのです」

「あーはい、そ、それじゃあこれお代です」

「へい、まいどありい！ごひいきにしてくれよお嬢ちゃん！」

「……この畏は作りだけはしっかりしてるから、また買いに来てやるのです」

その後も薬局で回復薬や解毒薬を、食料品店でウォーミル麦やオンブオオ、ジャンゴネギなんかを買い込んでお店を後にしました。流石に量が多い上に女性二人（と猫一匹）のため帰路は大分苦労しましたが、なんとか訓練所の私の部屋まで運び終えます。

この部屋、明日から別の訓練生が使うということですから泊まるのは今日が最後になるんですね。……短い間でしたけど、やっぱり自分が暮らしていた部屋には愛着を感じちゃったりなんかします。とりあえず荷物はまとめてネコ便で実家に送るとしまして、私自身はまたネルにお願いして運んでもらいますようか。あの骨皮車に乗るのは些か憂鬱ではあります……。

「お姉様は明日からどうするのです?」

スーブご飯（私が購入した）をすすりながらミミリが聞いてきます。

「実家に帰ってハンター生活になりますねー。なんか、ものすごく不安ですけど。ミミリはどうするんですか?」

「お姉様についていきたいところなのですが、ガルトがロザリーの手伝いをしてるとかで、ここで留守番なのです」

「あはは、それは大変ですね・・・」

沼地に行っただか言っていましたけど、ロザリー連れてじゃ帰ってくるのは一体いつになることやら。

「シエリアのことはニヤーに任せるニヤー！泥船に乗ったつもりでいるがいいニヤー！」

「沈む！沈みますからそれ！」

・・・とはいえ、ここぞというときにネルは頼りになりますからね。一人でハンターとしてやっていくのに比べれば、かなり心強いことは確かです。

「ニヤーにかかればドデカイモンスターもどっかーんで一撃のニヤー！」

絶対口には出しませんけどね！

まあ、という具合で訓練生活最終日を無事終えることができました。

明日からいよいよ本格的なハンター生活が始まります。おいしいご飯と優雅な生活のため、私が巨大なモンスターと戦う姿を幻視しながら床につくのです。

十四、商売繁盛（後書き）

というわけで無事に訓練所編が終了しました。シエリアも少しは成長した・・・とは言い難いですね。

えと、初期からここまで読んで下さっている方はよく分かってらっしゃると思いますが、更新ペースがはやめちゃです・・・。現在同時進行中の小説となるべく同じペースで進めたいのですが、やはりどちらかに偏ってしまう傾向があるようでして、うう。

今後はなるべく満遍なく執筆を進めていこうと思っておりますが、期待しないで待っていただけると幸いです。

十五、心機一転（前書き）

前回ほどではないにしろ、そこそこ間があいてしまったのはもう「愛敬」ということに・・・なる訳ないですねすみません。

代わりと言っちゃなんですが、いつもよりちょっとだけ長めです。だからといって内容が特別濃いわけではないですが。

十五、心機一転

旅立ちの朝。またの名を帰省の朝。どうやら夜のうちにロザリーとガルトは沼地から帰ってきていたらしく、私が訓練所を出ようとするまさにその時見送りに出てきました。

「ミリリから聞いてるよ、故郷に帰ってハンターとしてやってくんだってな。正直かなり心配だが・・・お前の悪知恵があればなんとかなるだろう」

わ、悪知恵って・・・。

「次に会うときまでにしつかり実戦で腕を磨いておきなさいまし。でないとおつという間にわたくしが追い抜いて差し上げますわよ！」

「ロザリーこそ、早いところこんな訓練終わらせた方がいいですよ？出ないと命が・・・じゃなかった、体力がもたないでしょうし」「さりげに怖いこと言わないで下さいましー！」

ガルト達がついているなら余程の、それこそ火山での訓練でもない限り心配ないでしょうね。ドンドルマの街は早いところ教官代えないと訓練で犠牲者とかでるんじゃないでしょうか・・・。

「ニヤー、車の準備が出来たのニヤー」

遠くの方でネルが叫んでいます。ちょっと名残惜しいですが、どうやらそろそろ行かなければならないようですな。

「あ、そういえばミリリはどこへ？」

今朝から姿を見ていないのですよね。ベッドにはいなかったの
まだ寝ているという訳ではないようですが・・・

「お姉様ー!!」

市街地の方から凄まじい叫びが聞こえてきたので恐る恐るながらも
そちらの方角を向いてみますと、脇目も振らず全力疾走でこちらに
むかってくるミミリの姿。は、速い。火山訓練の逃走劇の時より速
いんじゃないですかあれ・・・。

「はあ、はあ・・・何とか間に合ったのです・・・」

「ど、どうしたんですかそんなに急いで」

「こ、これっ！」

そういつて差し出してきたのは小さな石のような、宝石のようなも
のでした。お日様に透かしてみるときらきらまばゆく光ります。と
ても綺麗ですが・・・なんでしょうこれ？

「友好珠という装飾品なのです。これには、また再会したときにも
二人が仲良くいられるようにと願いがこめられています!その
・・・これからハンターとして頑張るお姉様の為にミミリからのプレ
ゼントなのです!」

なるほど、そういうことでしたか。最後に粹な計らいをしてくれま
す、まったく、こういう展開にはあんまり強くないんですから私・・・

「あの、また!また会うときまで大切にしてほしいのです!」

普段は大人顔負けの態度でしたけど、こういう一面を見せるところ
やっぱりまだまだ子供なんですね。

「ええ、大切にしますよ」

「ニヤーをいつまで待たせる気なんだニヤー！早く出ないと日のある
うちに着かないんだニヤー！」

本当にネルは空気ブレイカーですね・・・。

「わかりましたわかりました。それでは皆さん、またいつか会つと
きがあればよろしくお願いします」

「おう、田舎でも元気だな」

「次に会う時までくたばったりするんじゃないやありませんわよ？」

「また、いつかきつとなのです！」

長い長い砂漠の道を下って、更に雪原地帯を越えてゆきますと到着いたしましたのは私の故郷、ポツケ村であります。特に変わり映えもせず、皆さんのほほんとしてらっしゃいます。都会とは大違いですねえ。

とりあえず帰ってきたばかりではありませんが集会所に報告しなければなりません。ということで私を都会へ追いやった元凶の元へ足を運ぶとします。

「はいはいようこそ集会所へってシエリアちゃん!? 確か今、ドルマの街で訓練してるんじゃないかかったかい?」

フランクさん(仮)がおったまげた顔で聞いてきます。

「終わりましたよ? 修了証もほらここに」

といて突き出した修了証を見てフランクさん(仮)は更におったまげた顔をします。なんか信頼されてないみたいですね私……。

「ああ、すまないねそんな顔しないでくれよ。別に疑ってるわけじゃないんだ、ただ二週間やそこらで訓練を修了するだなんて殆ど聞いたことがなかったからね。まして女性となればなおさらだ。どこから奪い取ってきたんじゃないよね?」

「やっぱり疑ってるじゃないですかー!」

いや、まあそれだけ優秀だったってことですよね、ぐすん。泣いてなんかいませんぐすん。

「・・・そうだ！訓練を終えたつてことは明日から早速本格的な依頼が提示出来るようになるね。お詫びに色々準備しておくけど、参考までどんな訓練を受けてきたか教えてもらえるかな？」
「あー・・・、リオレウスさんとか？」

ちよつと長い間の沈黙です。

「ええと、参考までにどんな訓練を受けたか」

「いやだからその、リオレウスさんと対峙する訓練をですね・・・」

「ああ、まさかバーク教官の・・・？」

「ええ、そのまさかです」

「それなら仕方ないな・・・」

教官の噂は既に遠く離れたこの村までもたどり着くほどでしたか・・・。
生きて帰つてくれた私はきつと強運の持ち主だったのでですね。
そのうち訴えてやりましょう。

さて、久々に自宅へと戻つてきたわけですが特に変わった様子もないようです。武器も大量に散乱してますし、洗濯物見事に散り散り・・・ああ、片付けないと。

つてそんなことより、明日から依頼で現地に持つていく装備を整えておかないと。訓練ではずっと安っぽい片手剣を持つて行ってまし

たけど結局使い所はありませんでした。あんまり重い武器は持ちたくありませんし、となると必然的に候補は限られてきますね。

「武器を選んでののかニヤ？初心者なら一撃の威力が大きい大剣とかハンマーがオススメなのニヤー」

「あなたは私がそれらを狩場でブン回してる様が想像できますか？」

「ニヤ・・・振り回される様が目に浮かぶニヤ」

そこまで酷いことにはなりませんけどね！・・・多分。

「・・・それで、私でも扱えそうな武器といええば双剣、ボウガン、弓くらいでしょうか？」

「双剣はモンスターの目の前で戦う上にガードが出来ないからオススメ出来ないニヤ。それに弓は振り絞るのに結構な力があるニヤ、アンタじゃ無理だニヤー」

「う、となると消去法でボウガンですか」

「ボウガンにもライトとヘビィの二種類あるニヤ。まーアンタならライトが最適だと思うニヤー」

とってネルが差し出してきたのはぱつと見た感じ軽そうなボウガンでした。何と言いますか、普通のボウガンとはちょっと毛色が違うと言いますか、古来より伝わる火縄銃のような外見をしています。最近のボウガンのメカニカル感もモンスターの素材感も皆無です。フレームは恐らく木造でしょうか、とてもじゃありませんが弾丸発射の反動に耐えられるとは思えません。試しに持ってみます。

「うわ、軽い・・・」

軽いのはいいことですが、これは逆に不安に煽られるレベルの軽さでした。これなら片手剣の剣の部分だけのほうがまだ重いです。絶

対途中で壊れるこれ。

「そうニヤ。その軽さに加えてピンポイントな弾丸運用が可能な超古代武器、その名も神ヶ島だニヤ！まさかアンタの家に眠ってたなんて驚きだニヤー」

なんかわざとらしくネルは言います。なんででしょうね、にこにこ。

「そ、その笑顔は怖いからやめて欲しいニヤ・・・」

「そうですねー、とりあえず武器はこれで行ってみるとしますか、にこにこ」

何故かすっかり怯えきってしまったネルはさておき、次は防具ですね。流石に父のものはサイズが合いませんし、こればかりは新調せざるを得ないかしら？

「雪山へ行くならば耐寒防具を選ぶべきですよ。それならやっぱり定番のマフモフ装備がいいでしょうか？」

「そうだニヤー。防御力の高い装備はそれだけ値段も張るニヤから、安くてあったかい装備は万年金欠のアンタには最適だニヤ」

・・・とりあえず今日はもう遅いので、明日依頼を受ける前にちよいちよいと購入するとしますかね。それではベッドにダイブインー。

翌朝、気持ちのいい鳥の鳴き声と共に起床します。朝食や洗濯はなるべくちゃっちゃと片付けてポーチの準備を開始。ドンドルマのナノカドーで買った道具と少量のお金を詰めて、いざ装備屋へ。

「おお、シエリアちゃんじゃないか！いらっしやい。いつくるかいつくるかと首を長くして待ってたよ」

おう？私なんか待たれてました？

「はひ？私をですか？父じゃなくて？」

「そうそうそのウィリアからね、あんたがここにきたら防具一式渡すようにと言われてたんだよ。ほれ、こいつがその品物だ」

とって差し出しましたのはこじんまりとした木箱。埃かぶっていて、長い間放置されていたことがうかがえます。それはいいのですが、この方確かさつき防具一式と言っていましたよね？こんなちっさな箱じゃ普通の防具じゃ胴部分すら入らない気がしますけど・・・。等々と躊躇っていると店主さんが痺れを切らしたのか蓋を開封します。

「じ、これは・・・」

な、何と言い表せばいいでしょうかこの衝撃。

箱の中で私を待ち受けていた防具、それは。

真っ白な毛であしらわれた何か。

ひよっこり顔を覗かせる青い角。

それらを覆いつくすように揃えられたふさふさブーツ。

これぞまさしく……。

「……なんですかこれ」

まあブーツがある時点で防具だということは確定的に明らかですが、なんか、こつ。薄くないですか？全体的に。

「ニヤニヤ！？これは伝説の神獣素材を用いた幻の防具、キリンXシリーズかニヤ！？」

「ほほう、あなたの猫さんは詳しいようだねえ。その通り、こいつはキリンってーいう化け物みたいなモンスターを狩ったもののみが手にすることのできるキリンXシリーズさ。見た目からは想像もつかないような防御力であらゆる敵の攻撃を緩和してくれる、そいつあーすげえ代物なんだぜ？」

「ニヤーも初めて見たニヤ……。これなら重量も普段着と大差ないから、シエリアにぴったりだニヤ！」

「ええと、まー、軽いのはいいことなんでしょうけど……」

胴当てとおぼしき部位を手にとり、普段着の上に重ねながら

「……すごく小さいというか、露出度高めな気がするのですが、これいかに」

「やー流石はウィリアだ、娘さんにこんなもんを用意しておくなんてなあ」

本当、こんな（露出度の高い）ものを残してくれるなんて流石です

ねはははふふふ。

「あの、売って資金とかにしても」

「そんなもつたいたいなことするんじゃない！一生で一度見れば運がいいってほどのものだけこいつは」

「いや、その・・・うう、もういいですよこれで・・・」

父の趣味はいまいち理解出来ません・・・。

「あいあいいらっしやいシエリうえ！？」

がらがらの集会場で退屈そうにしていたフランクさん（もう正式でいいですよね？）がおったまげーな顔で出迎えてくれます。

「な、なんだいその格好は。コスプレ？」

「違います！れっきとした防具なんですよ・・・」

「あっはっはっ！分かってるよ。以前常連だった人が着てるのを見たことがあったからね。んでもまあまさか同じのをシエリアちゃんが着てくるとはね、くくくっ！」

「笑わないでくださいー！」

あーもう最悪です……。こんな格好で本当にクエストがこなせるのか、甚だ不安。

「いやあ、悪かったね。まーでもよく似合ってるよ、愛らしいというか、なんとというか、男どもが寄りつきそうな感じだ」

「それって褒めてます?」

「ああ褒めてるさ、立派なステータスじゃないかい」

「なんか、もういいです……。それより早速クエストの案内を是非とも」

「おおっとそうだったね。えーっと確か依頼書が……。あつたあつた」

カウンターの下から引っ張り出してきた紙束に早速目を通していきます。

雪山草の採取

メインターゲット：雪山草20本の納品

狩場：雪山

報酬：500z

依頼人：ドラッグストア『ムーンドラッグ』

薬品の生成に必要な雪山草が連日の猛吹雪で不足しています。出来る限り多くのハンターに協力していただけると助かります。

雪山の狩人

メインターゲット：ギアノス5頭の討伐

狩場：雪山

報酬：700z

依頼人：ポツケ村狩猟連合会

雪山で多数のギアノスが確認された。危険性はさほどないが、繁殖する前に狩猟出来るハンターを募る。

伝説の白雪団子を求めて

メインターゲット：ドスギアノス1頭の狩猟

狩場：雪山

報酬：1200z

依頼人：美食ハンタームッシュ

ドスギアノスから採れる貴重部位、ドスギアノスの目玉は想像を絶する味だという。是非とも食べてみたい！奴を狩猟してくれ！

鉱石ハンターの祝宴

マストオーダー：フルフル1頭の狩猟、バサルモス亜種1頭の狩猟

狩場：雪山

報酬：3300z

依頼人：鉱石愛好会

雪山で新たな鉱脈が発見されたのだが、同時にそこはモンスターの巣窟でもあった。特に食す鉱石によって体質を変えるグラビモスの幼体、バサルモスは通常とは異なる行動をしたという報告がある。

こいつらを狩猟して鉾脈の安全を確保してくれ！

皇族護衛隊

マストオーダー：特定人物の護衛、ダイミヨウザザミ1頭の狩猟

狩場：砂漠

報酬：5000Z+働きによって追加報酬

依頼人：国を統べるものとして、狩猟の一つも出来ぬと民に示しがつかん。砂漠で暴れ回るダイミヨウザザミを狩猟出来れば、民衆の評判も獲得できるだろう。そこでハンター諸君に対象狩猟に助力してはいただけないだろうか？報酬は弾もう。

長期依頼

大分個性的な依頼も少なからず混ざっていたようですが・・・まあその部分には目を閉じるとしましょうか。

「あの、なんかやけに依頼の数が少くないですか？」

「そうなんだよねえ。ほら、あなたの父さんが暫く顔出してないだろう？お陰でウィリア目当ての依頼がさっぱり入って来なくなっちゃったのさ。今じゃ村周辺以外の依頼が舞い込んでくることはほとんどなくなってるねえ」

「・・・え？でもポツケ村なら、他にも優秀なハンターさんはいらっしやいますよね？」

するとフランクさん、いつになくむつかしい顔つきで腕組みします。

「それがねえ、今は昔と違って交通手段も発達しただろう。お陰で今までここに依頼を受けにきていた奴らはみーんな都会へ流れていつてしまったんだよ」

はあ、なんか集会場界限も大変なんですね……。依頼が受けられるならどこでもいい気がしますが、やっぱり種類とか報酬に差があるのかしら。

……。いや、まあ、私には関係ない話でしたね。

「えっと、それじゃあとりあえず一番報酬がいいやつを……」

「あーだめだめ、やめときな。下二つの依頼はとてもじゃないけど、シエリアちゃんみたいな新米ハンターがこなせるような難易度じゃないよ」

「あら、そうなんですか？なんかレウスさんよりも楽そうに見えるんですけど」

「あそこの訓練と比べたら命がいくつあっても足りなくなるって……」

……。無言で額がざるを得ません。

「とりあえずギアノス退」

「へーいへいマドモワゼル！私の依頼は一体全体どーなっているアールね!？」

集会場の扉をたたき付けるように開き、突然ちよつと特異な口調でどなりちらしてきたのは小太りのおじ様。髭をもつさりと蓄えて、偉そうに仁王立ちしてらっしゃいます。

「あ、あらまあムツシュさんいらっしゃい。ごめんなさいねえ、今

取り込み中なのでちょっと後に」

「オオウ！？もしかしてそこにいるお嬢ちゃんが依頼を受けてくれるデースか？これはベリーナイスなタイミングだね！」

「はひっ！？」

突然指さされます。もしかして今、なんかとんでもない厄介ごことに巻き込まれかけてます？

「こいつはお邪魔したネ！それではよい結果を待っているアルよ！
等と言いますと、ぶち開けた扉を律儀に戻しつつ、さっさと集会場から消え去ってしまいました。
いや、ああいう迷惑な方がいなくなられるのは実に喜ばしい方です、ええ。いやいや、ですけどね。」

「これは・・・もしかしてもしかしますか？」

フランクさんに期待と不安を1：9でブレンドした眼差しを投げってみました。するとフランクさんは

「・・・すまないね」

と短く答えました。その眼差しは憐れみ10割に満ち満ちていらっ
しゃいました。

・・・つまり、やね、と。

「ふふふ、もう好きにして下さい」

「悪いようにはしないから、胸張って出てお行き」

かくしてクエストが決定したのです……。

十五、心機一転（後書き）

とかなんとかそんな流れで訓練後初クエスト受注（？）まで。

ま、なんといいましょうか、女キャラがキリン装備を着るのはもはや宿命だと思っんです。

そのうちお話が進めば新装備を着たりもするとは思いますが・・・。

十六、遠隔猟法（前書き）

無理矢理依頼を押し付けられたシエリア。いよいよポツケ村集会場
編スタートです。

十六、遠隔獵法

相変わらず雪山は入口から寒いです。洞窟前からこの調子ですから、山頂付近はそれはもう凍えるってレベルじゃないでしょうね。

初めて雪山草を取りにきたときはうっかり夕暮れ時に来てしまった為猛吹雪にさらされてしまいました。現在はまだお昼時。これなら天候は怖くないですね。

ええ、まあ、天候はいいのですが。

「確か・・・ドスギアノスとかいいましたよね？それって以前、危うく美味しくいただかれるところだったドスランポスさんの親戚みたいなものですか？」

鞆の中で寒そうにふるふる震えていたネルがひよっこり顔だけ出します。

「その通りニヤ。ギアノスは昔、ランポス亜種と呼ばれていたほどランポスと似た生態をしてるニヤ」

「あの、それってまた美味しく食べられるんじゃない？」

「なんの為にお金使って拡散弾と買ってきたニヤ！ニヤーも爆弾で援護するから気を張るニヤ！」

拡散弾というのは、着弾すると小さな火薬玉を散布して周囲に爆発を起こす弾丸のことですね。私が担いできたボウガン、神ヶ島はこの拡散弾の発射が得意らしいのですが・・・普通の人は反動が大きすぎてまともに扱えず、しかも値段も割と高いので持ってこないそうです。ええ、なのですが

「このボウガンを使うなら拡散弾以外ありえないニヤ。というか、アンタじゃこれ以外扱えないニヤ」

とのこと。反動については、このボウガンが完全に吸収して殆ど感じないとのことですが、こんな棒切れみたいなので本当に大丈夫なんでしょうか・・・些かどころかめちゃくちゃ不安です。

弾は家にあつた分を含めて30発ほど。他の弾は一切持ってきてません（きつぱり

というかこれだけでも十分重たいので、持ってくる余裕がなかった言つた方が正しいですね。普通の人は多くても9発しか持つていないと聞きますが、その理由が分かつた気がしますね・・・。

さて、そんなことを話しているうちに洞窟を抜け、山頂へと到着しました。確かに以前ほど酷い吹雪ではありませんが、しっかり雪が降つてる辺り流石雪山です。こりゃロザリーとかきたら凍死しそうですね・・・。

かく言う私も格好が格好ですので、かなり寒い。ホットドリンクが支給品にあつたのですかさず飲み干しましたが、それでも寒いところは寒い。露出度高すぎるんですよこの防具は本当にもう・・・。

ギャウウウウ！

ひゃい！？なんか雄叫びらしきものが聞こえてきませんでしたか？
ちよつとまだボウガンの試射もしてませんつてのにそんなそんなそ
んな。と、とりあえず落ち着きましよう私そうそう落ち着くんです
！そそそ素数でも数えて！ええと2、4、6、8、10・・・

「崖の上！あつちだニヤ！」

鞆の中も危険と判断したネルがぴゅーつと地面に着地して指差しま
す。その方角には・・・

ギャウウー！！

ででで出ましたドスギアノス！あの群れの中でも一際大きい姿は間
違いありません、鋭い眼光をこちらに向けて、今にも私達を食べよ
うと襲い掛かってきそうです。

「ひーひー！飛び掛かってきますよどーするんですか！」

「お、落ち着くニヤ！とりあえず弾をボウガンに装填して・・・」

「それは今やりましたよ！こここれ、撃っちゃっていいんですか！
？」

「も、もう終わったニヤ！？それなら遠慮はいらニヤいニヤ、スコ
ープ覗いてドカーンと決めてやるニヤ！」

ええいこうなつては自棄です！弾丸の発射はこのレバーでいいんで

すよね？よし、標準を合わせて、合わせて・・・。

「ってー！スコープついてないじゃないですかー！」

「ニヤニヤ！？こ、こうなったら気合いニヤ！大体当たりそうな位置に向けてズガンニヤ！」

ネルがいつになくてきとーですね！しかしもう撃つしかありません、取り巻きのギアノスさん達も傾斜から下りてきてますし、ドスギアノスと一緒に襲い掛かってきたらひとたまりもありません！

「悪霊たいさあーん！！！」

引き金を引くと、ボガンという爆音と共にほんの少し後退します。はて弾丸はといますと、ちょうど飛び掛かってきたドスギアノスさんの腹部に見事クリーンヒット。衝撃でそのまま吹き飛ばされます。

また衝突によって飛び散った火薬玉は周囲に飛び散り、ボスの着地を今か今かと待っていたギアノス達に直撃、爆炎と共に散り散りになったギアノスはそのままだなくなりました。

「空中的に当たるとはなかなかやるニヤ、シエリア！見直したニヤ！」

「え、えへへ、そうですか？まあ私がちょーっと本気を出してしまえばこんなものですよ」

「でも喜ぶのは早いニヤ、ボスさんがお出ましのようだニヤ」

グルルルルと唸りをあげながら、お腹を焦がしたドスギアノスさんが近づいてきます。流石に大きいだけのことはありますね、一撃で

は倒れませんか・・・。

「拡散弾は直接当てても大したダメージは与えられないニヤ。拡散した火薬玉の爆発に物凄い力があるんだニヤー」

「なるほど・・・でも火薬玉を当てるにはリオレウスさんならまだしも、ドスギアノスさんはちょっと小さすぎやしませんか？」

「アンタなら大丈夫ニヤ」

この自信はどこからくるんですかね。

とにかく出し惜しみしても仕方ありません。じりじりと近づいてくるドスギアノスさんにうまいこと銃口を向けて・・・

「れつつファイヤー!!」

砲撃開始。発射するときの物凄い爆音の割に反動は大したこともなく、装填さえしていれば連射も可能なほどです。このおんぼろ木造フレームが非常に不安ではありましたが、どうやらしっかり持ちこたえてくれそうです。

「ニヤーも加勢するニヤー！」

とネルの放り投げた爆弾がドスギアノスさんの足元で爆発、体勢を崩すことに成功します。身動きのとれないまま拡散弾が直撃、散らばった火薬玉の爆風はドスギアノスさんを中心に捉え、吹き飛ばします。ちよつとこのシーンは残虐というかグロテスクというかそういう感じなので描写はしませんね・・・。

「やったニヤー、ドスギアノスの目玉剥ぎ取ったニヤー」
「ひーひー！そんなエグいもの見せびらかさないでくださいー！」
「何言ってるニヤ、今回納品を頼まれたのはこれだニヤ」
「分かっても近づけないで下さいー！」

うげえ、やつぱりこんな依頼きっぱり断っておくべきだった・・・。

その後、ドスギアノスさん達の鱗や皮、牙なんかを丁寧に剥ぎ取った後、特に何事もなく集会場まで戻って参りました。押し付けられた時はどーなるかと思いましたが、なんとか無事終わった今としてはまあおっけーですね。報酬も悪くないですし。素材も売ってしまえばなかなかのお金になること間違いなしです。

「ンノー！これはまさか、伝説のドスギアノスの目玉ではありませんか！？」

「ええ、そのまさかですよ。というか貴方が依頼をおしつ・・・任せたんじゃ」

「ワンダフル！アンビリーバボー！！よくぞ取ってきて下さいました！いやーあれはハンターにとっては素材になり得ない珍品中の珍品でね、今回のように特別に依頼を出さないとないりませんでしたのヨ」

「ははあ、そいつは大変で・・・」

そりゃ目玉とつてこいなんて意味分らない依頼、引き受けてくれる人もなかないでしょうね。

「そのうえ剥ぎ取るのも難しいデース。よくぞ持つてかえってきマシタ！いやあつぱれデース！」

「え？難しいんですかこれ？」

「まあ多少は骨が折れたニヤ。でもニヤーにかかればなんてことないニヤ」

「へえほおふうん」

剥ぎ取る描写すらなかったたのでその苦労はこれっぽっちも伝わってきませんでした。が・・・まあ依頼人が言うのですからそうなのでしよう多分。

「ほいじゃこれ、報酬だよ。無駄遣いするんじゃないよ？」

フランクさんが手渡しして下さったのは紛うことなくお金、1500Zです。無論遣いなんて以っての外、食費に次のクエスト費にと、この程度のお金では足りなくらいです。早いところ信頼を得てもっと高い報酬のクエストを受けられるようにならねば！・・・あ、でもあんまり危ないの任されるのはごめんですからね本当に

「しかしこんな早く片付けてくれるとはやるじゃないかシエリアちゃん。やつぱりウィリアの血を引いてるんだねえ」

「いや、ははは、まあそれほどでも」

「ちようど新しい依頼がいくつか入ったところなんだ。まだ日も高いし、腕試しと思ってもう一つ試してみるかい？」

「・・・はい？」

合同誌の製作

メインターゲット：フルフル一頭の狩猟

狩場：雪山

報酬：2600Z

依頼人：サークル『ミルフィーユ』

新たにフルフルを題材とした本を書くことになりました。しかし生態がわからず、描写に苦戦しています。そこでハンターとの戦闘を見学して、生態を学びたいと思っています。どうか期待に添える方はいらっしやらないでしょうか。

女性ハンター歓迎

新素材の発見

メインターゲット：アウラネビュス5個の納品

狩場：雪山

報酬：2000Z

依頼人：鉱石愛好会

雪山奥部で興味深い鉱石が発見された。もしかするとこれは世紀の大発見になるかもしれない！急ぎ探掘可能なハンターを募集する。なお、未開の地の為どのようなモンスターがいるか分からない。十分に注意してくれ。

咆哮！ティガレックス！

メインターゲット：ティガレックス一頭の狩猟

狩場：雪山

報酬：4000Z

依頼人：謎のハンター

あいつだ、あいつがまた現れやがった。昔凄腕のハンターが討伐したと聞いたが、どこからわいてきやがったのか……。こいつが村を襲えば非常に厄介なことになる。誰か狩猟してくれ！

紅白雪合戦

マストオーダー：フルフル一頭の狩猟、フルフル亜種一頭の狩猟

狩場：雪山

報酬：3700Z

依頼人：ポツケ村安全保障委員会

ティガレックスにフルフル、更にはその亜種が村近辺の雪山で立て続けに発生しています。こちらではフルフル達を狩猟出来るハンターさんを募集しています。いつ村が危険にさらされるかわかりませんので、早急な受注をお願いします！

皇族護衛隊

マストオーダー：特定人物の護衛、ダイミョウザザミー頭の狩猟

狩場：砂漠

報酬：5000Z + 働きによって追加報酬

依頼人：国を統べるものとして、狩猟の一つも出来ぬと民に示しがつかん。砂漠で暴れ回るダイヤモンドウザザミを狩猟出来れば、民衆の評判も獲得できるだろう。そこでハンター諸君に対象狩猟に助力してはいただけないだろうか？報酬は弾もう。

長期依頼

今回もなかなか個性的な依頼が舞い込んでるようですね。・・・特に最初とか。

「あの、なんかこれ鉱石採掘以外に道がない気がするんですけど気のせいですか気のせいじゃないですよね」

「いやいや、正直その依頼はお勧めできないよ。未開の地ってのは思ってるより危険だからね。フルフルあたりがいんじゃないかな」

「それじゃフルフル二頭でお願いします」

「え？いや、そっちじゃなくて一番上の・・・」
「二頭でお願いします」

上の依頼だけは受けちゃダメですね、絶対。

「うー、しかし流石にこれに行かせるのは危険すぎるなあ。かといって今は簡単な依頼もないし・・・」

唸りつつ考え込む فرانクさん。そりゃ私だって危ない依頼だとは

思いますけど、上のと比べたら、ねえ。しかもこの格好ですから、ねえ。

「よし分かった。私も手伝ってやろう。どうせ留守にしたところで、シエリアちゃん以外に訪ねてくる奴もいないだろうしね」

「へ？フランクさんってハンターさんだったんですか！？」

「フランクさんって・・・」

あらいけない、うっかり口が滑ってしまいましたわおほほほほ。

「私にはカルラって名前があってね・・・まあいいや。そうだよ、こうみえてシエリアちゃんくらいの年からバリバリ狩りしてたもんさ。それに実はこの依頼、私が貼ったものでね。急いでるのは事実なんだ」

「ふええ。ふらんく・・・カルラさんって結構色んなことやってるんですね」

「まあね。私もシエリアちゃんくらいの時から狩場に出たもんだからさ、昔はウィリアによく世話してもらったもんだよ。最近見かけないっていうけどあいつのことだ、ひょっこり帰ってくるだろうね」

「あはは、よくお分かりで・・・」

父は本当にどこで何をしてることやら。あ、いや、まあ別にどうでもいいんですけどね。

「もしシエリアちゃんに何かあったら、あいつが帰ってきた時うるさいからねえ。・・・ま、それだけアンタは愛されてるってことだよ」

「何ですかそのこじつけは・・・行くとなればさっさと行きますよ。早いところ用意しちゃって来てください！」

「はいはい。そいじゃ準備してくるから、ベースキャンプで落ち合
うとするかい」

そついうとカルラさんはちやっちやと奥へ行つてしまいました。う
むむ、仕方ありませんね、先に向かうとしますか。

「大丈夫なのかニャー？確か集会場の受付嬢はハンター登録できな
かった気がするニャけど・・・」

「・・・え？」

十六、遠隔猟法（後書き）

フランクさんって名前あったんだ・・・。

十七、紅白合戦（前書き）

紅白フルフル戦前編です。長くなる感じだったので2つ以上に分けるハメに・・・。

十七、紅白合戦

はい、こんにちはシエリアです。前はネルの不吉な言葉を最後に終了したわけですが、今回は早々に雪山まで足を運んで参りました。前回ついに名前が明らかになったカルラさんですが、どうやらまだ着いてはいない様子。そりゃまあ私達の方が先に出てきたので当然といえば当然ですが、レディを待たせるとは中々根性の据わった人です。

「ひニヤー、ベースキャンプはどうしてこつも寒いかなニヤー。今度ポーチに紅蓮石をいっばいつめてきて欲しいニヤ」

「紅蓮石はなかなか手に入らないので火薬岩でいいですか？」

「え、遠慮しておくニヤ・・・」

今度火山に言った時にでも考えておきましょうか。

「おおおい、待たせて悪かったねシエリアちゃん」

「あ、カルラさん遅いですよー。すつごく待ったんですからね？」

「今着いたばかりだニヤぎい!？」

口うるさい子猫ちゃんはポーチの奥底に押し込んでおきましょう。

「いやあ悪かったね。何せ久々なもんだから、武器の手入れに時間がかつちやっつてね」

とって両手で握るのは・・・確かシュリヨウブエとか言いましたっけ？あれ、カリカリピーだったような気も。うーん、父つたら色んな呼び方をしてたもので、イマイチ思い出せませんねえ。

「うわぁ凄いですねそのカリカリピー。それでモンスターさんを殴り潰すんですか？」

「カリ、ピー？・・・まあいいや、その通りさ。こいつは中は空洞でハンマーに比べると軽いけど、その分丈夫な作りになってるのさ。その上演奏することで、仲間に様々な支援効果をもたらすことも出来る、攻防一体の武器ってところだね」

「おー、なんか凄そうですね！」

支援効果がどういう仕組みなのかはよくわかりませんが、まー深く考えちゃダメですよ。モドリ玉とかもそうでしたし。

「防具もなんかかつちょいいですねー。見るからに雪原民族って感じがします！」

「・・・褒め言葉と受け取っておくよ。まあシェリアちゃんのほどは強くないけどね、このブランゴシリーズは」

二人して真っ白な防具を身につけちゃってます。これ雪山じゃお互い見失いそうになる気が・・・あ、フラグじゃないですよ！いやホント！

「それじゃ早速行くとしようか。急がないと夕暮れになっちまうし、出来る限り早く終わらせたいね」

「了解しましたたいちよー！」

「ニヤー！」

とまあいつものような軽い感じで雪山頂上付近までやってきました。やってきたのはいいのですが、モンスターさんの気配がまるで致しません。普段ならここで「ぎゃおー」とか「うぎゃあああ」とかそういう展開になったりするわけですが、ここまで静かだと逆に不気味ですね……。

「なんか何もいないみたいですね。別のハンターさんが既にハンティングしちゃったとか？」

「フルフルは天井や壁なんかと同化して静かに近づいてくるニャ。油断するとぱっくり食べられてしまうニャ」

「お、シエリアちゃんところのネコは物知りなんだねえ。その通り、少しでも物音がしたら気をつけた方がいいよ？尤も、亜種の方は真っ赤な体してるからすぐ分かんと思うんだが……」

真っ赤……うえ、なんか三倍速そうですね。いやまあ原種の速さも知りませんけど。

今のところはどちらも姿を現さないようですし、明日の為に食材の確保でもしておこうかしら？

ギヤオオオオオオ！！！！

ひぎいいい！なんですかこの狙いすましたようなタイミングでの耳をつんざく咆哮はー！一同（ネル含め）思わず耳を塞ぎます。

咆哮のした方向には羨ましいまでに色白で、少々（どころではないかも）グロテスクな容姿のモンスターさんがぶるぶると排気口みたいな口を震わせていらっしやいます。・・・結構大きいです。リオレウスさんほどではありませんが、あの巨体でプレスされた日にはペーパーシエリアRPGが始まってしまいます。これ前にも言いましてね。

「気をつけるニヤ、奴は電撃プレスで遠距離にも攻撃を仕掛けてくるニヤ。正面から逃れるように散開するのが賢いニヤね」

「すっかり解説キャラが定着してますね・・・。つまり相手の背後に回り込めばオールオツケーってことですね」

「よし、それじゃ亜種が来る前にさっさとおわらせようかね。シエリアちゃん！散会してあいつの射程外から逃れて・・・」

「先手必勝です！渾身の拡散だーん！」

背後がガラ空きだったので即刻攻撃開始。あれだけの大きければ狙いをつけるまでもありません。大量購入した拡散弾を惜しみなく連射、この速度で撃つても殆ど反動がないんですから、このボウガンとんでもないですね。

初弾が直撃した時にはこちらを向きはじめましたがちょっと遅いですね。2発目、3発目が次々と着弾し、爆炎がフルフルさんを包み込みます。フルフルのステーキやってやつですか？・・・あまり食欲は沸きませんね。

「こっち向いたニヤ！一時離脱だニヤ！」

「了解ですます！」

フルフルさんがこちらを向いてなにやら首を上げ始めたので、さっさと背面に回り込みます。

するとなんとということでしょう、雄叫びを上げつつ顔を地面にたた

きつめたフルフルさんのお口から、明らかに触れたら1アウトな電撃がバリバリ地面を這っているではありませんか！あああんなの別に怖くもなんとものならないですけど、警戒するにこしたことはないですね！

「あの攻撃だけは気をつけた方がいいね。先日もあるをまともに食らって全治1ヶ月の全身大火傷を負った奴がいたから」

「そういう恐ろしいこと言わないで下さいー！」

ペーパーシエリアに加えてフライドシエリアですか、あははは、勘弁してください。

と、カルラさんが暢気なことに笛を掲げて何やら音楽のようなものを奏でています。非常に心地いい音色で、あのカルラさんが演奏しているとはとてもじゃないですが思えませんね。

「なんか今、物凄く失礼なこと思わなかったかい？」

「えええいいやまさかそんなそんなハハハ」

「・・・この笛は強走効果つてのが得意でね、聞いた人はたちまち持久力が増して、普段よりも長く走れるようになるのさ」

「ほええ〜」

「強走薬つてのを飲んだ時と同じ効果なんだがー、まああれはちょっと高級だから飲んだことないか」

「えっ」

「えっ？」

いつだかの密林訓練の時にグビツと全部飲み干してしまったような記憶がありますが、あれって高価なものだったのですか・・・。

「その点笛ならいつでも好きなときに効果をかけられるから便利なもんさ。まあ生産時には相応の費用がかかるのは他の武器同様だけ

どね」

ほへー、ボウガンと違って生産的な武器なんですねー。見た目も鮮やかな青色の羽根をあしらっていてオシャレです。私もあいう武器を扱ってみたい。

「ただ直接これで殴って戦うってのは女の私にや無理だからね、直接攻撃するのはシェリアちゃんに任せた！」

「それは勿論・・・って、なんですか？戦わない？」

「支援はしっかりしてやるけど、元々私はハンターじゃないんでね。狩猟笛での戦い方ってのはからつきしさ、はっはっは」

「笑い事じゃないですよー！」

前回ネルが心配していたのはこういうことだったんですね・・・。支援自体はありがたいですけど、こういうのなんていうんでしたっけ？えっと確か、ふきせ

「ニヤ！？十二時の方角ニヤー！！」

どっちですかそれと思わず突っ込みそうになったのを堪え、そうであるう方角を向いてみますと。

「な、なんですかあの真っ赤で不気味なモンスターさんは」

「あいつがフルフル亜種、同じく今回のターゲットだね。その凶暴さは原種以上とも言われているから、用心した方がいいよ」

「そりゃ今までの流れからして用心に用心を重ねますけど・・・」

と、今まで（文字通り）首を長くして待っていたフルフル原種さんが再びこちら目掛けて蓄電を開始します。まーとはいえ、同じ攻撃を何回やったところで当たってあげる私シェリアではございません。

即座に背面に移動しつつ、拡散弾発射の準備を整えます。

……ですが。

「九時の方向に注意ニヤ！亜種の電撃ブレスが来るニヤ！」

「だからそれってどっちのことを・・・電撃ブレス？」

原種さんがチャージ完了した模様で首を大きく振り上げますと、その向こう側に同じく口をバチバチ言わせながら首を振り上げる亜種さんの姿が。あれ？これまじくはないですか？

とりあえず準備が整っていたボウガンの引き金を引いて拡散弾は無事発射、命中致しましたが、それとほぼ同時に亜種さんも電撃ブレスを発射。標的はどうみても

「私ですよねー！！！」

「何やってるニヤ！早く左右に避けるニヤ！」

「ででもなんだか逃げ道がなさそうでどこが安全地帯なのやら（あたふた）」

「ひニヤー！まだ死にたくないニヤー！」

鈍い音と共に、視界は白く染まりました。いや、雪の色かと思間違えるほどですが、よくみると黒く焦げた跡があります。

そうです、先ほどの拡散弾が直撃してバランスを失い、倒れたフルフル原種さんです。本来なら原種さんの足元を抜けて私をビリビリさせるはずだった電撃ブレスは、彼によって見事に食い止められたのです。も勿論これを狙ってわざと避けなかったんですよ？震えて足が動かなかったとかそんなことはうんいやホント。

「シエリアちゃん大丈夫かい!？」

心配そうに原種さんの向こう側からカルラさんの声がします。

「な、なんとか・・・」

しかし気を抜いている暇はありません。前後からモロに攻撃を受けた原種さんがよろめきながらも立ち上がり、首を地面にこすりつけながら鼻息荒くこちらを向いてきます。あいや、これは怒らせちゃったかしら？

遙か後方の亜種さんはカルラさんの方へ首を向けてぐるると唸っていらつしやる様子。複数のモンスターを相手にするのはこれが初めてではありませんが、それらを全て討伐しろというのは流石に初。とりあえずダメージを与えた原種から狙って倒し、さっさと二対一にしてしまいたいところですが・・・

ギヤオオオオオ!!

ひいひい鼓膜が！鼓膜がパーンしますよこの咆哮！

「シエリアちゃん、こっちの赤いのはなんとかして引き付けておくから、まずはその白いのをよろしく頼んだよ!」

「そ、そんなこと出来るんですかー?」

「こつみえても支援ならウィリアにも負けないんだよ?赤は任せておきな!」

「あーいや、父は支援とかそういうの全然得意ではなかったそうですが・・・いやそんなこと言ってる場合じゃないですね了解しまし

た！」

先手必勝とばかりに早速その巨体で飛び掛かってくる原種さんに挨拶代わりの拡散弾を撃ち込み、撃墜します。いくら一撃一撃が重い攻撃だといっても、当たらなければ意味がありません。どうもこのフルフルさん動き自体はかなり緩慢な様子で、攻撃しようとする予備の動作を見てから拡散弾を撃ってあげればこちらに攻撃が到達する前に潰すことが出来そうです（電撃プレスはそうもいかないですが）。一撃が重いというのも、正直重かるうが軽かるうが私のような弱い少女がモンスターに攻撃されれば重傷確定なのでさしたる問題ではありませんね、ハハハ。

原種さんの方に向き直るとゆらゆらと体を揺らしながらも立ち上がりつつ、こちらに首を向けてひ弱そうに唸っています。なんですか？もしかして度重なる攻撃でもう瀕死状態ですか？ふふ、口ほどにもない奴ですね！次の一撃で確実に決めてやりますよ！

・・・と、意気込んでボウガン構えたのはいいのですが。

「あ、あら？ちよつとちよつと、どちらへー！？」

わっせわっせと体にしては小さな翼で、お空の彼方へ飛び去ってゆきます。あー、確か今回って狩猟が目的だったような・・・。

「に、逃げるが勝ちって奴ですか？」

「慌てないニヤ、奴は傷を負うと来る途中の洞窟にある巣穴に逃げて休む習性があるニヤ。あんまり長く休ませると回復されるから、急いで向かうニヤ！」

洞窟ですかー。そういえばいつも通り道ではありませんでしたが、あま

り探索したことはありませんね。あるとしても村周辺でも採れるキノコが八チミツ程度ですからね……。

「カルラさーん、そっちの赤いのは大丈夫ですかー？」

「ああ、なんとかなってるよ。そのネコの言う通り、早いところ行っってきてトドメ刺してきな！」

おろ、話が早いですね。こんなに順調にいつて、洞窟内でとんでもない罠がシエリアを待ち受けてるのであった、まる。なんてことにならないですよ。……あ、いやだからフラグじゃないですつてば！

十七、紅白合戦（後書き）

ふ、フラグじゃないですからね！

十八、絶対強者（前書き）

こゝこの展開は一体・・・

十八、絶対強者

やってまいりました雪山名物のながーい洞窟。山頂に比べると幾分か気温は高いですが、ここで活動するハンターは殆どいません。洞窟名産のハチミツやキノコといった類は全て村やその周辺で大量に採れる為採取ポイントとしては人気ありませんし、モンスターさんも殆ど住み着いていません。討伐依頼といえば、せいぜい村里にありてくる可能性のあるギアノスさんを追い払う程度でしょうか？

そんな人気のない寂れた洞窟ですが、唯一モンスターが逃げ込んだ時のみ賑わいを見せるらしいです。いやまあ今がまさにその時のはずなんですけど。

「・・・寝てますね」

「寝てるニヤー」

何度も爆撃を受けたフルフルさん、ぐたーとした格好で寝息を立てていらっしやいます。いや、なんとというか、長閑ですねえ。

「何和んでるニヤ。こうやって寝てる間にもじゃんじゃん体力を回復されてるニヤ。ずばっと一撃でやってしまっニヤー」

ネルも爆弾を（どこからか）取り出して爆撃準備完了みたいです。今日のネルはかなり好戦的ですねー。やっぱり高額報酬がかかっているとやる気も違うのかしら？

などと和やかな雰囲気を見せる私達ですが、その気の緩みが悪かったのでしょうか。平和な空気はたった一撃の咆哮に打ち砕かれます。

ドギヤアアアア！！！！

耳をつんざくような、なんて足湯並に生温い表現ではとてもではありませんが済まされません。音圧というか、音風というか、とにかくものつすごい衝撃が私の小さな体を遙か後方に吹っ飛ばしたのです！

幸い雪がクッション代わりになって痛みは殆どありませんでしたが、空中を半回転位した私の脳はぐるぐるパニック状態です。フルフルさんは直前まで睡眠していらっしやいましたし、はて一体何が私を吹き飛ばしたのでしょうか。

「テイ、ティガレックスだニヤー！！」

答えはネルがさらっと言って下さいました。私もそのモンスターの存在はくらいは知っています。生態系の最上位に君臨し、周辺の小さな村を襲っては幾度も壊滅に追いやったと言われる最強最悪の飛竜。非常に活動的なのであの古龍より厄介と言われています。・・・え？マジですか？

ギヤオオオオオオ！！

強烈な目覚ましで飛び起きたフルフルさんの首元にティガレックスさんの牙や爪が突き刺さります。必死の抵抗を見せるフルフルさんですが、直前に受けていた傷のせいで思ったように動いていない様子。

「あ、あの、これって一応討伐成功です・・・よね？」

「何呑気なこと言ってるニヤー！さっさと逃げるニヤー！...！」

「ししし承知しました！」

フルフルさんがむしゃむしゃされている目の前で足早にその場を立ち去ろうと試みましたが、動いたのが悪かったのでしょうか。ティガレックスさんの恐ろしく鋭い眼光がギリリとこちらを向きます。思わず怯んで止まってしまったのが更にいけなかったのか、フルフルだったものを放置したままゆっくりとこちらに方向転換をして、じりじりと迫ってきます。

「あの、これ、どうすれば」

あんな化け物みたいなのに狙いをつけられたら、とてもじゃないですが逃げられる自信ありません。ボウガンを構えて見ますもこれ発射したら絶対逆効果な気がします・・・

「こつなったらやけっぱちニヤー！特製爆弾で当たって食われるだニヤー！」

「食われちゃダメですよー！」

しかし戦う意外に手段がなさそうなのもまた事実。仕方ありません、これで食べられたらその時は弱肉強食つてことで納得・・・

出来るわけありませんよー！

「こつちだ、ティガレックス！」

人の声です。というか、かなり懐かしい声です。いや、ちょっと鬱陶しい声かも……。

「せいやあ！」

洞窟上部から現れた男性はそのままティガレックスさんの背中に飛び降り大剣を一刺し、そのまま動きを止めにかかります。突然現れたイレギュラーの攻撃に悶えるティガレックスさん。

「今だ、シエリア！」

「へ？は、はひ！」

止まってる的を狙うのは容易いことです。装填した拡散弾を1発、2発、3発と次々に直撃させていきます。美味しいところだとばかりにネルも爆弾を投擲。爆風と舞い上がる雪でティガレックスさんだかなんだか分からなくなっています。まだまだ爆撃。

装填した分の弾がなくなると、男性は突き立てた剣を引き抜きます。するとあれだけの爆撃を受けたにも関わらず、ティガレックスさんは姿勢を屈め、次の瞬間には大ジャンプ！あつという間に天井の穴から外へ脱出してしまいました。

「……」

啞然として声も出ませんでしたとも。

あ、いや、突然のティガレックスさん乱入に驚いたとか、そういうのもあるっちゃあるんですがそうではなくてですね。

「・・・父さん？」

「いやぁー、はっは！まさかお前がここまでたくましいハンターに成長するとは、明日雪でも降るんじゃないかね！」

いや雪なら毎日降ってますけど、なんて野暮なツッコミは面倒なのでしません。

・・・ええと、まあ何と言いますか、これが失踪中の私の父、ウイリアです。いや、見つかったからもう失踪中ではないのかしら？いやいや、そんなことはどーでもいいとしまして。

「い、今までどこいってたんですか！こちらら死ぬような思いで生活して、事実今死にそうになっただんですよ！」

「いやぁ、異国の地で恐ろしいモンスターが現れたっていうもんだから、成敗しろーってうるさくてねえ、ははは。まー元気そうで何よりだよ！その装備も似合ってるしな！」

思わず露出した肌を隠します。

「やっぱりこれは父さんの趣味ですか」

「イエス！いつか自分の娘にキリン装備を着せてやりたいと思ってなあ・・・それはもうこの瞬間を何年待ったことか・・・うう！」
「力説されても困るんですけど」

・・・ご覧の通り変人です。いや変態かも。多分両方です。

「・・・まあ言い訳は後で聞きます。とりあえずカルラさんの援護に行かないと」

「おお、それなら心配ない。ここに来る途中孤軍奮闘してたあいつを見つけたものだから、ついでに討伐してきた」

「っ、ついでって・・・」

ハンターの腕前としてはやはり群を抜いています。一人で先ほどのティガレックスさんを討伐したという噂も、どうやら本当のようです。

「まあ立ち話もなんだろう、一旦村に戻ろっじゃないか」

というわけで再びやって参りましたのはポケケ村集会場。カルラさんはすでに帰っていたようで、カウンターの定位置でお酒をひっかけていました。

「おおウイリアにシエリアちゃんおかえりー。ハードな依頼だったろうけどごくろーさん、そこにあるのは報酬だから受け取ってな
ー」

テーブルに置かれた茶封筒にはしっかりと報酬金、3700zが輝いていらっしやいました。大金です！素材を剥ぎ取って来るのは失敗してしまいましたが、これなら一週間以上は持ちそうですよ！

とかなんとか、ついいつもの癖で思ってしまったのですが。

「父さんがいない間、一人でほんつとうに大変だったんですからね？食べられそうになったり、食べられそうになったり、あと危うく老人にも殺されかけましたが」

「バーグ教官か！はっはっは、あの老いぼれまだ現役で教官やってるっただけ驚きだ」

「笑い事じゃない！火山ですよ火山？リオレウスさんですよ！？」
「なーに、お前は俺の自慢の一人娘だ。あいつの訓練くらいどーっ
てことないだろうよ！」

ものすごい過剰評価です。そりゃまあ、最近何度か狩りに出て若干なりとも自信はついてきたところですが。

「全くウイリアは・・・少しあ娘さんのこといたわってやらないと、
本当に嫌われちゃうよ？」

「もう相当嫌ってるつもりなんですがね」

「なあに心配いらさないさ。あまり好かれすぎると狩りも思うように
いけないだろう？ハンターの親として、これくらいがちょうどいい
のさ」

いや、ドヤ顔でそんなこと言われても困りますが。

「とにかくまーなんだ、一人で生計立てられてるみたいで安心した
ぞ。これで心置きなく次の依頼を片付けられるってーもんだ」

「それはよかつ・・・え？次の依頼？」

「最近ハンター不足とかなんとかで依頼が溜まってるみたいでなあ。
まあ心配すんな！お前なら今後の狩りもうまくやっていけるだろう
よー！」

啞然として言葉も出ませんでした。散々ほつたらかしにしておいて、まだ飽き足りないというのですか。なんか、怒りというか、呆れというか、この言いようのない感情のはけ口はどこかしら。

等と心中で愚痴つてますと、父はさっそく身支度を始めます。長期保存用の携帯食料に猫タクシーの手配。こりゃ本気でまた当分帰ってくる気配はありません。

「・・・あなたって人は」

流石に、我慢の限界でした。

「もう知りません！狩りでもなんでも好きなだけしてくればいいですよ！」

久々に大声を出した気がします。集会場にいた少ないハンターさん全員の視線が一気に集まりましたが、もうそんなことは知ったことではありません。行き場を失った怒りを隠すように、足早にその場を立ち去ります。

何なんですかあのバカ親は。少しでも、本当にほんの少しでも心配してた私が馬鹿みたいじゃないですか。何も言わずに突然消えて、ひよっこり帰ってきてはまたバイバイですか？

いくら温厚な私でも、今回ばかりは何かが吹っ切れたような気がしました。自宅の寝室に飛び込むと、そのまま毛布に包まってみたりします。

こうなったら、絶対許してやりません。今日の狩りの成功で、一人でも食べていける自信もあるっちゃあります。父に頼らずとも、一人で生きていけばいいんです。ホント、泣いて謝っても許してあげないんだから・・・。

潤んだ目を擦りながら、毛布に顔を埋めます。外の寒さが厳しいだけに、温かさが一層身に染みます。

あまりにも気持ち良くて、イライラしていた心を鎮めてくれると同時、うとうとと眠気がおそってきます。

そしてそのまま、意識は深い闇底へと落ちていきました。

十八、絶対強者（後書き）

こゝこの展開は一体・・・

幕間、英雄と漆黒の伝説（前書き）

お久しぶりの幕間です。今回はちょこっとだけ本編と関係あるかな？

幕間、英雄と漆黒の伝説

ポツケ村、集会場。

「ちよいと待ちな」

何も言わずに出ていこうとするハンターの男を止める受付嬢。男は先導して歩く猫を待たせ、振り向いた。

「んお？どうした？」

「あのままでいいのかい？アンタ、戻ってこれるかも分からないんだろう？」

「ふむ、どうしてそう思う？」

笑みを浮かべつつ話をしていた男の顔が、若干濁る。

「普通依頼の途中で戻ってこないだろうさ。あの子、アンタの大切な一人娘なんだろう？戻ってきてまたすぐ出ていったりしたらいくらあの子だって怒るさ。それが目に見えているにも関わらず帰ってきたってことは、つまりそういうことだろう？」

「相変わらず鋭いな、お前は」

先まで賑わっていた集会場もすっかり人が出払って、気づけば二人だけになっていた。

「今までの報酬はドンドルマ銀行に預金してある。お前でも受け取

れるようにしてあるから、必要になったら頼むぞ」

男が差し出した小さな紙切れを引き出しにしまうと、男は待たせた猫になにやら指示を送る。

「しかし、心配じゃないのかい？あんな若い子を一人で、しかもハンター業で食っていくっていうんだよ？」

「それなら大丈夫だ。あいつもついてるし、お前が無茶な依頼でも勧めない限りはな」

男は鋭利な視線を投げる。

「・・・ああ、悪かったよ。でもあの依頼はあの子本人が受けたいって言ったんだ。集会場としても、受注者の意思はなるべく尊重してやりたいからね」

相手に聞こえないよう、小さくため息。

「それで、何を相手にしようってんだい？ティガレックスもラオシヤンロンも一人で退ける、アンタみたいな腕前のハンターが、戻ってこれるかどうかも分からないだなんて」

「ご主人様、準備完了しましたニヤ」

「おう、ご苦労さん」

猫の呼びかけには軽く答えるが。

「ルーウェン、アルーダ地方をはじめとした数々の大国を滅亡に導

いた竜の噂、聞いたこと位はあるだろう？そいつが今、ドンドルマの近くまできてるんだとよ」

「・・・おいおい、勇氣と無謀は違つて教えたのはアンタじゃないか」

「無謀でも、やらねばならない時つてもあるもんだ」

「じゃあ、その為にわざわざ戻ってきたのかい？あの子が怒るのを承知で」

男はふつと鼻で笑つて見せた。

「英雄というものは、常に孤独でなければならぬのだよ」

男を乗せた二輪車は、荒い雪道を駆けていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5485h/>

少女的狩人の日常

2010年10月16日15時11分発行